

第9回

# さくらサミット in 上越 '97

「桜のまちづくりと住民参加」



新潟県上越市

第9回

# さくらサミット in 上越 '97

「桜のまちづくりと住民参加」

記録誌

主催：新潟県上越市

## CONTENTS / 目次

タイムスケジュール	2
参加自治体出席者紹介	3
開会あいさつ	4
基調講演	6
討 議	17

## タイムスケジュール

4月13日（日）

- 13:00 開会
- 13:10 基調講演  
「桜を生かしたまちづくり」  
講師／小澤<sup>ふしろう</sup>普照
- 14:30 サミット  
「桜のまちづくりと住民参加」  
コーディネーター／泉 真也  
助言者／小澤普照  
パネリスト／17自治体代表
- 記念植樹
- 17:00 閉会

## 参加自治体出席者紹介

- 北海道 静内町長／増本 一男  
宮城県 柴田町助役／鈴木 昇一  
秋田県 角館町収入役／佐藤 勇太郎  
茨城県 日立市長／飯山 利雄  
群馬県 鬼石町長／関口 茂樹  
埼玉県 幸手市総務部  
企画調整課主幹／浜田 靖三  
東京都 北区長／北本 正雄  
新潟県 加治川村長／高橋 公則  
長野県 高遠町長／北原 三平  
奈良県 吉野町長／福井 良盟  
鳥取県 西伯町助役／中川 正昭  
島根県 木次町長／田中 豊繁  
高知県 佐川町長／和田 啓作  
長崎県 大村市収入役／梅澤 一成  
熊本県 水上村長／成尾 政紀  
宮崎県 北郷町長／植野 章一  
新潟県 上越市長／宮越 馨

## 開会あいさつ

上越市長  
宮越 馨氏



本日は大変素晴らしい天候に恵まれての観桜会の中で、このようにサミットが開催できますことを心から嬉しく思うところです。サミット開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

桜花爛漫、3400本の桜が咲き誇る『高田城百万人観桜会』の最中、第9回『さくらサミット in 上越』を開催する運びとなりました。ご多忙の中、遠路はるばる大勢の市区町村長の皆さんのご来越を賜り、また当市ご出身の小澤普照さんに基調講演の講師としてお越しいただき、心から歓迎申し上げますとともに深く感謝申し上げます。小澤先生には『桜を生かしたまちづくり』と題して、このあと講演を行っていただく予定ですが、示唆に富んだお話をいただけるものと期待いたします。どうかよろしく申し上げます。

今回のサミットのテーマは『桜のまちづくりと住民参加』です。本日お集まりの各自治体はいずれも桜を素材にして、個性あるまちづくりに真剣に取り組んでおられます。当市高田公園の桜も歴史をひもとけば、徳川家康の六男、松平忠輝公が築いた高田城跡に陸軍第13師団の入城を祝い、在郷軍人団が明治42年に2200本を植えたのが始まりです。以後、多くの市民が補植や管理に懸命の努力を重ね、市民の総意により昭和55年には市の木に桜を制定し、全国に誇れる素晴らしい景観づくりに努めているところです。本日のサミットではこのような先人の努力に思いをはせながら、住民と行政が今後どのようにして桜を守り、育てていくかなど、貴重な意見交換ができるものと大いに期待を寄せているところです。

さて数々の大型プロジェクトが同時進行し、環日本海時代の日本海ゲートウェー都市として、各方面から熱い注目を集めている上越市では、昨年、市民との共同作品である自前のまちづくり計画『のびやかJプラン』を策定しました。今後30年に

わたる超長期のまちづくり構想である本プランは『みどりの生活快適都市・上越』を将来都市像に掲げ、30万人都市機能の整備をみすえた具体的、戦略的な施策の方向を明らかにしています。

夢あふれるこの計画に基づき、既に様々な事業がスタートしています。桜を生かしたまちづくりについても、昨年、市民を交えた『1万本の桜が咲き誇るまちづくり推進委員会』を組織し、桜の増植計画などを鋭意進めています。本事業を推進するためにも、また目前に迫った21世紀に向けて花とみどりに包まれた潤いのあるまちづくりを進めるためにも、本日のサミットにおけるご提言等を大いに役立ててまいりたいと存ずるところです。なおサミット終了後は皆さんのお時間の許すかぎり、飛躍の時代を迎えた当市の姿をつぶさにご覧いただければ幸いに存ずるところです。

最後になりましたが、今回のサミットを機にさらに交流の輪が広がり、桜を生かしたまちづくりが一層推進されることを祈念申し上げ、併せて関係各位のご健勝とご活躍をお祈り申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。

## 基調講演 — 小澤普昭氏



皆さん、こんにちは。先ほど若干事前の打ち合わせの時間がありまして、今日コーディネーターをしていただきます泉先生から、今日のさくらサミットはとにかく楽しいこうというご提案がありましたので、何とかそのような線に沿ってやれば、私も大変ありがたいと思っています。

私は上越に生まれまして高校時代までこの土地で過ごしたわけですが、それからずいぶん時間が経ってしまいました。日本各地、それから外国の方まで出掛けまして森林問題をやっていますが、ごぶさたしているものですから、あの人は本当に上越の生まれのかなと言われかねないところです。まずこの土地に育ったことを証明するために、歌を歌わせていただきまして、そこからやってみようかなと思っています。(歌入る)

この歌は『高田の四季』という歌で地元の方は皆さんご存じですが、最近新潟県民謡になってきました。私が役所で最後に長官をしておりましたとき、かつて役所に勤務された方で、特に新聞記者の方々などが、たまたま夜になって長官室に来て、『高田の四季』を歌おうよというので大声で歌い、そのまま大勢で歌いながら帰ったというようなこともあり印象に残っています。

さて、今日のテーマは『桜を生かしたまちづくり』ですが、私はこの『まちづくり』という言葉を少し広く解釈してお話しさせていただきます。

つい最近ですが、現在JR東日本の最高顧問をなさっている住田正二さんにお会いしまして、ちょうどJRと桜の関係について話をする機会がありました。

JR東日本は最近、大変森づくりにご熱心で、平成5年度から今日までに15万本ほど木を植えてこられました。この周辺は東日本の会社がやっています、青森県までずっと範囲に入っています。ご承知の方も多いと思いますが、住田正二さんはJR発足後、東日本の社長になられ、それから会長に就任し、昨年最高顧問を務めていらっしゃる方です。最近、『役人につけるクスリ』という本を出版されたのですが、これは非常に評判も高く、よく売れています。

ところで、JRは今年、3月の秋田新幹線開通に伴って、秋田県に桜の木を植えようと計

画しているそうです。これはどういうことかということ、鉄道には鉄道防雪林としてスギの木をたくさん植えているのですが、これだけでは風情が少し足りない。ですから色々な木を植えようということで、その一環として今年は特に秋田新幹線の開通を記念して、ボランティアの方も募って桜の木を植えようということになったのだそうです。場所は田沢湖町、鉄道の線路で言いますと刺巻-神代間、1キロくらいの区間だそうですが、そこに桜を植えるというお話をお聞きしたところです。

最近、自然保護や緑化運動といった緑の関係はお陰さまで大勢の方に参加していただけるようになりました。例えば保険大手の日本生命さんも、ニッセイ緑の財団を設立なさいます、ここは100万本の木を植えようということで一生懸命おやりになっています。ニッセイ緑の財団もJRを応援してやろうと協力態勢を整えておられます。

森づくりや植樹運動を通じて、私は色々な方とお近づきになりましたが、そういう意味でJRの住田さんともお付き合いがあります。今や『緑を増やそう』という運動は、従来のようにスギ、ヒノキばかりではなくて、色々な種類をたくさん選んで植えていこうという動きに変わってきています。その中で桜が非常に大きな比重を占めています。こういう風に、関係者があらゆる機会を生かして、他の緑に限らず桜も増やしていただけたらと思います。

次に、私は桜に関していくつか非常に印象深い思い出があるのですが、その中の中国の話を見せていただきたいと思います。

中国に日本から桜を持って行きましたのは比較的新しい話で、確か25年ほど前になるのですが、その時に日中国交回復を記念して木を植えようということになり、桜とカラマツを向こうに持って行きました。当時私が勤めていました林野庁も、そのお手伝いをさせていただきました。どういうところに植えたかということ、2000本ほどの桜を、北京市内の天壇公園をはじめ、非常に有名な公園とか大きな公園に数百本ずつ分けて植えました。それからカラマツの方は、市内から少し北にある万里の長城周辺に植えてあります。観光等で訪れた際には、そこは視察したいと言えはできるのですが、普通は入れませんのでご存じない方が多いと思います。万里の長城を上って行った際、あの辺に少し木が生えていたなという印象をもたれた方も多いと思いますが、実はそこにカラマツを植えています。

ちょうど10年ほど前に仕事で中国に行く機会があり、北京や東北地方を回りましたが、日本からの桜やカラマツがどうなっているか見せてほしいとお話ししましたところ、快く案内していただいたことがありました。

私どもが案内されたのは、天壇公園ではなくて、通称玉淵潭公園でした。観光案内書などでは宋慶齡児童科学公園という名前になっているものもあります。池がありまして、その池の名前を取って公園の名前にしているわけです。市内中心部からは5キロほど西の方にありますが、北京市内です。ここで日本から来た桜をご覧にいれましょうということだったので。ですからその桜を植えましてから12～13年後の話です。

桜はかなり大きくなっていました。中国の人も桜は好きなようで、いいことだと思ったのですが、実は大変なことが起きていました。何が大変かというと、桜はご存じのように病気になりやすいのですが、日本から植えた桜が半分くらい枯れかけていたのです。何とかしていただきたいという話でした。私はあらかじめその準備はしておりませんでしたので、とにかく見せて下さいということで桜の植わっているところへ参りました。

どんなところに植えてあるかと言いますと、玉淵潭という大きな池がありますが、その池のほとりに植えておられました。中国式の樹木の育成法は、雨が少ないところですから、木には水をやるのが一番いいという発想に立つわけですが、木の周りに直径が1メートル50センチくらい、深さ20センチくらいの窪みを造りまして、そこに水をかけておやりになる。万里の長城に植えたカラマツも同じようにしておられました。池のほとりで桜に水をやるとういうことになるのかというと、色々な理由があると思いますが、樹皮がはがれてきて、確かに病気にかかっているわけです。どういう手当てをしているのか尋ねると、「せっせせせと水をやるだけです」とおっしゃるものですから、待てよ、これは水のやりすぎということもありうるなと思いましたが、原因を究明しないで適当なことは言えません。そこで、「まずは状況だけ把握して帰り、日本で専門家の話も聞いて処方箋を作って差し上げましょう」ということになったのです。

林野庁にも研究所がありますから、そことも相談しまして、文献を色々と揃えてお送りしました。さて、その後の様子が私はずっと気になっていたのですが、5年前に林野庁を退職して今の仕事に就いてすぐ、何と2度目の訪問の機会に恵まれたのです。中国でたまたま日中の森林に関する合同シンポジウムが開催されまして、4年前に北京に参りました。そこでまた玉淵潭公園を訪問しまして、その後の様子を尋ねたわけです。そうしましたら、「作戦を変えました」と今度はおっしゃるのです。

桜は中国の方々も色々研究されたようですが、虫がついたり、病気にかかったりするのはなかなか避けにくいとご承知になったようです。今、中国の方々も徹底的に増やしてやろうという作戦に切り替えまして、その公園では数百本植えられて、それが半分くらいは

病気になったりしたわけですが、「今度は3000本作戦で、3000本植えましたから」と。接ぎ木などをされまして、そこは苗木を育てられたわけです。一気に増植されまして、「これだけ植えたから今度は大丈夫でしょう」とおっしゃって相当明るい顔でした。つまりプラス思考に切り替えられたようで、私もこれは良かったと。病気にかかった桜についての手当ては十分にさせていただく必要もありますが、どんどん増やしていこうではないかという発想もなかなかいい作戦だと思います。

また、中国人の桜観について若干聞いてみたところ、中国の人も桜は好きで、日本人と同じようにお花見を楽しみにしているとのこと。これは世界共通だなと思い、気を強くして帰ってきました。

もともと桜の原産地がどこかということ、これは難しいのですが、研究者の方によると、ネパールとか、インド、あるいはミャンマー、あの辺ではないかと言われていました。ただ、ここにある桜はもともと秋咲きの桜で、その辺が桜のルーツなのではとも見られています。中国では雲南省辺りに野生の桜があるという話です。それから台湾、沖縄、日本、日本は沖縄から北海道まで分布しているわけですが、その辺が世界の桜ゾーンではないかという話です。アメリカへの桜が一番有名ですが、ヨーロッパ各国にも日本から桜がどんどん送られていますので、これから相当増えてくるのではないかと思います。

『日本さくらの会』という財団法人がありますが、そこは色々な方々の協力も得ながら大変ご熱心に桜の普及活動に努めておられ、国内はもとより、海外にも日本の桜を普及しておられます。どこの国の方に聞きましても、桜はいいですねと押し並べておっしゃっていますので、桜はこれから世界各国に広まっていくのではないかと思います。

3番目の話ですが、『桜を通じたまちづくり』、『地域に桜を定着させる』という試みが色々なされていますので、その話を少しさせていただきます。桜の名所は全国各地にたくさんあります。例えば日本の桜百選という、桜の会が色々選定した場所は新潟県ではどこにあるかと言いますと、この高田公園の桜はもちろん入っています。村上城址公園、大河津分水も入っています。その他、百選では間に合わなくて別選もありまして、そちらにお入れになる。新潟県の場合でも加治川の桜堤のようなものもあります。さらに天然記念物指定されているのもたくさんあります。例えば小木の御所桜、その他県内にも国の天然記念物指定、あるいは県の指定がたくさんあります。全国となりますと、これはもっと大変です。

その中でごく最近のものを取り上げてみたいと思います。まずお話ししたいのは、名古屋

屋の瑞穂区で昨年3月に立てられた桜の構想で、テーマは『桜と山崎川を生かしたまちづくり』です。山か川が大体入ってきます。川をきれいにする運動と、桜を植えて町の景観をよくしようというものがどうも多いようです。これは、何かこういう運動を起こすためにはまず住民の方々の賛同を得なければならず、コンセンサスづくりとして当然大きな目標の設定が必要になってくるためです。名古屋市の場合は、まず区のシンボルに桜を作り目的を形成しようとなっています。これなら反対する人はないでしょうから、すんなり決まるのだと思います。

そしてどういうことにするかというと、その区あるいは市町村の特徴を生かすのです。名古屋市では住宅地と工場地域、両方の特徴がありました。そこで桜でつなごうという発想になり、地域の賛同を得たようです。そんな中から区の一体感を強めるということを目指設定され、具体的な施策として、桜の増植運動を始めたという構想になっています。まず桜を増やす、桜を楽しむ、川をきれいにする、桜や川の似合う環境をつくる。似合う環境というのは面白いのですが、中身をその四つに分けておられます。

まず桜を増やすという仕組みですが、第1点、道路、公園など、公共空間に桜を増やしましょう。次は工場地域があるので工場の敷地に桜を増やしましょう。記念植樹という形で増やし方を考えましょう。卒業記念、入学記念、結婚記念、人生には色々な記念がありますから、そういう記念に植えていく。それを助長するために苗木の無償配布をやりましょう。それは区民や企業等から希望があれば、無償で供給していきますということを織り込もうということです。

桜のオーナーの制度、桜に持ち主を付けよう。これは各地でかなり行われています。本日サミット参加の自治体でも色々行っているのではないかと思います。もう一つは桜トラスト運動をやりましょう。このトラストも本日参加なさっている吉野町が行っているとも聞いていますが、よそでいいことを行っているのを取り上げてみようという話です。桜トラストは吉野の町長さんの方がお詳しいと思いますが、桜の木や土地の購入をどんどん増やしていこうという運動で、そのために基金を設立するなどしています。

それから桜愛護会も設立しよう。そういう愛護団体がないと、確かに後々うまくいきません。桜の鉢植えを増やしましょう。昔流でいうと盆栽になりますが、範囲がもう少し広がっているようです。どこの町へ行っても空き地があるわけではないので、広い土地がなければできないということだと一種の限界があります。鉢植えなら狭いところにも入り込めますから、鉢植えの桜を増やすというのも並行してやろうという構想になっています。

もう一つ、桜の害虫の話とか色々ありますが、計画的に桜の世代交代をしようというのが少し新鮮味があります。木の中で桜はやや寿命の短い部類と言われていることから、最初から後継樹を育てる計画までである方が、将来的にいいだろうということのようです。世代交代計画を織り込んだ桜構想という、大変計画的な話で感心もしました。

ところで高田の桜は満開でソメイヨシノが主体になっていますが、桜の寿命としてソメイヨシノが特に短いということはないと思います。ただソメイヨシノが植わっているところは、今日もそうですが本当に人が多い。大変結構なことで、市としての地域活性化政策から言えば喜ばしいことですが、根を大勢の人に踏みつけられる桜としてはたまったものではありません。土壌が良ければもっと長生きできるのでしょうか、そうはいかないという桜にとってかわいそうな側面があります。これからの桜の保護を考えますと、なるべく長生きしてもらうためには色々な配慮が必要という気がします。

最近、日本で名所と言われる所で最も多いのはソメイヨシノです。例えば弘前城址の桜もソメイヨシノが大部分です。ただ、あそこは条件もいいようで、100年ものの桜もかなりあると聞いていますので、ソメイヨシノが50年の寿命というのは俗説だとお考えいただいた方がいいのではないかと思います。

次に桜を楽しむ計画です。このためには多種多様な種類を植えてみようということになります。これは専門家に意見を聞きますと色々面白い。桜の会の方などに聞きますと、「200種類以上はありますが、ソメイヨシノをメインにし、その他に色々散りばめていくのがいいですよ」と。何といっても一番好かれる桜はソメイヨシノということのようです。ただ、八重咲きの桜ならソメイヨシノが散った後に見頃が来ますから、長く楽しもうとするなら、色々な種類を増やしていこうということになります。瑞穂区の場合は多種多様に増やしてみようということだそうです。

それから桜図書館とか、桜博物館を整備していこうとおっしゃっています。これも面白いかもしれません。桜マップの作成とか、桜講座開講による啓発など、ありとあらゆるものを盛り込もうとなさっておられるようですが、そういう計画です。

次に川をきれいにしようという計画ですが、これは『川をきれいにする会』を創設したり、下水道の改修をしようとおっしゃっています。桜並木は堤防とかそういうところに多く、河川の景観整備と非常に密接な関係があります。この上越地方でも河川堤防に直接というのは色々制約もあるようですが、最近は堤防の脇にという感じで増やしていこうと計画しているそうです。先ほど紹介していただきましたように、私は河川審議会の委

員もしているため、最近、河川関係の方ともお話をしますが、いずれにしても川をきれいにしようということは、皆さん頭にしっかり入ってきておられます。

最後に桜や川の似合う環境をつくる。これは具体的には未定で、そこから先の詳細はこれからという段階だそうです。逆に言えば桜を増やして、今度は桜に似合う環境をどうつくるかというのは一つの課題だろうと思います。以上が瑞穂区のお話です。

その他、群馬県の下仁田町は昨年5月、『さくらびあ計画』という構想を立てました。この構想ではオーナー制度を取り入れたほか、シンボルキャラクターの制作も盛り込んでいます。どういものができてくるのか楽しみです、そのねらいは、桜のディズニーランド建設というなかなか気宇壮大です。確かにキャラクターのいいものができれば、桜のディズニーランドも夢ではないのかもしれないかもしれません。そんな夢のある計画を立てておられます。

兵庫県の加西市は平成2年10月、『桜の園整備計画』という構想を立てました。この桜の園というのは翌3年から着手されており、スローガンは『もときらめく町へ』です。地域の人たちの心をつかむスローガンというのは非常に大切だと思います。『もときらめく町へ』をスローガンにして、加西市の景観なり、町の環境をよくしようというわけです。たまたま加西市には、陸上競技のグラウンドなどがある約10ヘクタールほどの総合公園がありまして、そこを中心に整備していこうということ。このように場所を選ぶことも必要です。総合公園のようなところに集中的にやっていくケースと、町全体に広めていくケースと色々分かれていますが、これはその地域によっての選択があるのではないかと思います。加西市の場合は10カ年計画で、10年でおやりになるようです。

もう一つ、紹介させていただきますが、福島県の三春町の目標はかなり大きくて、スローガンは『日本一の桜の里づくり』です。ここは昭和61年に構想策定がされていますが、三春町のしだれ桜は日本一と言われるだけありまして、天然記念物に指定されている三春滝桜という桜もあるのです。その桜と、もう一つ、この町に建設された三春ダムを中心に、記念公園などをつくり桜を植えていこうという計画です。

ちょっと特徴があると思いましたが、記念公園の他にもう一つ、三春工芸村をつくらうという発想です。桜の工芸は桜細工など色々ありますから、これを生かそうということだと思います。地域活性化型にはそういう話があるのが当然かと思えます。目標は2万本以上というかなり大きい構想です。日本一とおっしゃるけれども、これは決して大げさな話ではないと感じました。それから1本1000円の募金運動もやりましょう。こういう運動も併せながらやっっていこうという話があります。

他にもたくさんありますが、共通しているのはコンセンサスを固め、スローガンを高く掲げ、そして地域の参加を得ながら推進するところかなと思います。

あと一つ、二つお話をさせていただきます。こういう運動、それから既に相当有名になっている地域は誰が支えてきているのかということです。その自治体が非常に熱心だというのはもちろんですが、もう一つはボランティア活動の方々に、名前が出てきたところはみんなそういう方々が一生懸命やっておられることは間違いありません。

この4月4日に『桜中央祭り』という桜祭りの中央大会がありました。日本桜の会が主催していて、今年で32回目です。その時に桜功労者表彰というのがあります。今年の桜功労者表彰の中からちょっとご紹介します。今回のサミットに来ておられるところでは、宮城県柴田町の、<sup>なかしまひょうすけ</sup>中島亮祐さんとおっしゃるのでしょうか、この方が発起人の1人となり、昭和53年に柴田町桜の会を発足させましたというのがありました。この方々が船岡城址公園を中心として1000本もの桜を植えてこられたおかげで、柴田町の桜が有名になっているわけです。今年表彰を受けておられるのはこうした方です。

他に今日いらっしゃっているのは高遠町です。高遠の桜は本当に有名で、大体の方はご存じです。高遠町では今年、2件、功労者表彰を受けておられます。一つは松倉松寿会で、桜からのまちづくりということで町のほうで進めておられるわけですが、町内の希望者に高遠小彼岸桜を配布しておられるのだそうで、それを受けて立とうということで松寿会ができました。この会は昭和60年に県道ばたに桜を植えられまして、その保護管理にあたってこられたということで表彰されています。模範的、自発的な保護管理組織であるということです。

あとひと方、高遠町で表彰を受けられましたのは中村幸治さんとおっしゃる方です。この方は町の役場職員をされていて、役場におられた時は高遠の城址公園の桜の育成に努めておられたのですが、退職なさってからは、さらにまた本格的におやりになっているという事例です。退職後は商工会の事務局長をおやりになりまして、桜についてさらに実践活動しておられます。商工会ですから、関連商品開発を行ったり、桜の保護育成を地域振興に結びつけたことを行ったりということで、熱心に活動されていて、今年の功労者表彰になっています。

郷里の新潟県関係では、まず南魚沼郡大和町が『地域の創造は自分たちの手で』というのを合言葉に、ダムの周辺に桜を植えられたり、桜並木を造成しておられるということで、今年表彰を受けました。



もう一つ、新潟県関連のご紹介があります。東京の世田谷区に住んでおられる方ですが、郷里が佐渡の方で、この方は昭和52年から苗木づくりを始められて、佐渡島に7000本の苗木を寄付されたそうです。自ら苗木の接ぎ木をやり、何をやり、相当な数ですのでちょっと驚きましたが、せっせっせと郷里に苗木を送られた。そういうことをおやりになっていて、その方が表彰を受けられています。

ご当地、高田地方はどうかというと、高田はずっと前に表彰を受けられていまして、昭和52年に高田の桜の会が既に功労者になっておられるそうです。それからもう20年も経っていますから、最近は何におやりになっている方がいるのではないかと思います。大いに進めていただきたいと思います。こういう事例は全国にたくさんありまして、それが地域の桜を支えている大きな原動力になっているということで、その一端をご紹介させていただきます。

さて、私は森林の行政などをやっていたから、ここで少し行政的な見地から桜の品種保存の話をしていただきたいと思います。日本の桜は品種が大変あり、しかも各地域で呼び名が色々と違います。昭和41年に林野庁で桜の系統保存の事業をやろうということになり、その時に全国から桜の品種を集めたところ、500種類ちょっとありました。それらを集め、呼び名は違っても実際は同じというものを系統別に分類しましたところ、最終的には230~240種類くらいに整理できました。

各地にこれだけの桜があるわけですが、何かの折にその桜が絶えることもあるわけです。その時、あらゆる系統を国のほうで保存しておいて、即供給できるようにしよう。そこで保存地域をつくりました。これは現在東京の八王子市にあります。皆さま方も東京においでになった際には、是非お寄りいただければと思います。八王子市の多摩御陵の隣にあり、多摩森林科学園という研究所です。桜の研究だけをやっているわけではありませんが、かなり桜を主体にやっています。

今、研究所には約2000本ほどの、その後加えた品種も含め、大体250種類の桜があります。日本の桜は一応全部集まっていると思っていただいて結構です。ソメイヨシノのような一重桜から、八重咲きの桜、さらにキクザクラ。花卉の数は5弁の桜からキクザクラといい、300枚から400枚というものもあります。例えば金沢の兼六園に行きますと、兼六園キクザクラというのがあります。キクザクラの系統は花卉の数が200枚とか300枚と多くなりますが、こういう種類もあります。ですから全部見ることができると言っても決しておかしくはないわけです。そして野生種型のヤマザクラ、サトザクラの系統等も系統的にこ

覧になることができます。

ここの研究所はもともと宮内省の付属の林業試験所だったところですが、桜の品種保存と国内の樹木を800種類、それから外国の樹木も300種類展示してあります。お亡くなりになった昭和天皇は、植物学に大変ご関心が高く、この研究所にもずいぶん足を運ばれていました。そういう由緒のある研究所ですから、是非ご覧になっていただきたいと思います。

一般に国立の研究所はなかなか開放しないものですが、ちょうど5年ほど前、桜を見たいという方が大変増えて、是非開放しろという話が上がりました。当時私は行政の責任者だったのですが、国民の要望にお応えしましょうと研究所を開放することにしました。ただし、あまりわんわん押しかけられても維持管理ができませんので、有料にさせていただきます。ということで、入場料を4月だけ400円、5月以降は300円いただくことにしました。ところが、有料にしましたところ、無料のときよりかえって人が増えてしまったのです。大変ありがたい話ですが、多い時は何千人といらっしゃるものですから、その分入場料は施設整備に充てまして、歩道なども整備しないといけないということでやっています。

多摩森林科学園の研究所に行きますと、品種系統別の展示館もあります。また、大阪の花博覧会で使われた立派な映像装置などを無料でいただいてきて、そういうもので映写もやっています。そこへ行きますと色々なものが見られるようになっていきます。

その中で桜の品種系統の系統図を作りましたが、肝心のソメイヨシノが意外と難しい。これは一体どういうことのできたのか、系統的には不明なところもありますが、由来は大体分かっていますので、そのことだけ最後にお話ししておきたいと思います。

ソメイヨシノは、ちょうど江戸末期、明治に移り変わるくらいの頃に、東京の染井というところにいた植木屋のイトウさんがつくった品種ということになっています。染井とは一体どこだという話になりますが、それは今でいう山の手線沿線の駒込と巣鴨のちょうど中間くらいのところで、これが大ヒットの桜になったわけです。ですからそんなに古い桜ではなくて、明治以来植えられてきました。

それが吉野桜と称して売り出されました。桜といえば吉野が一番有名ですから、吉野と付けたら売れるだろうと。商売根性はよく分かります。ただしこれが一体どうしてできたのかというとはっきりしないのです。そのうちに、「吉野桜と言っているけれども、あれはそうではないのではないか」という声が出てきて、明治30年頃、現在の科学博物館の前身である博物局が調査に乗り出しました。そして検討しましたところ、これは吉野桜ではないということになり、染井の吉野桜ということからソメイヨシノと命名され、今日に

至っているわけです。

現在、研究されている人に聞くと、これはオオシマザクラとエドヒガンザクラの掛け合わせではないかという説が強いのですが、全くそうだと切り切るまでには至っていないというのが実際です。いずれにしても一世を風靡しているソメイヨシノという桜は、そういう由来のものだということをお話し申し上げておく次第です。

桜は万人に親しまれ、人の心を本当に美しくしてくれる花ではないかと思っています。そして決して日本人だけではなくて、あらゆる人たちが好む花でもありますから、今日のような桜サミットを契機にされまして、桜の花が日本国中、それから国際的にも愛される花になりますように心からお祈りしまして、私の話を終わらせていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

## ◎ 討 議 — 「桜のまちづくりと住民参加」



泉 ただいまご紹介いただきました泉眞也でございます。今、6回目と聞いて私もびっくりしたのですが、何回か一緒にサミットをやらせていただいている間に、すっかりさくらサミットのファンになりました。サミットの言葉の意味は皆さん既にご存じだと思いますが、頂上会談、つまり一番偉い人達が集まって会議をすることをサミットといい、各自治体の首長さん、町長さん方々のお集まりの会でございます。今日は一般市民の方も一緒に是非お聞きになり、場合により、どうしてもこのことを聞きたいということがあれば手を挙げてください。これはルールにはないのですが、コーディネーターの特権でそういうことがあってもいいかなと考えております。

そのサミットについて軽くご紹介いたしますと、今回で実は9回目でございます。来年、10回目の会場がどこになるか私もワクワクしていますが、10回目になると次のステップに入りますので、今回は最初のステップを取りまとめるとても重要なサミットだと考えています。皆さんもそういう意味で是非ご協力をいただきたいと思います。

さて、このサミット開催の日取りについてですが、ちょうど桜が満開の頃に開催できるようにと毎回各自治体の方々が知恵を絞って検討するのですが、少なくとも私の知る限り、今日のようにドンピシャリといったのは初めてです。桜も満開、お天気もよろしい。これは別に市長さんがお天気を用意されたのではないと思いますが、とてもラッキーな市だな

という気がします。次のステップに入る取りまとめの会としてはとてもいいときに、いい場所です。できたということ、皆さんと一緒に喜びたいと思います。

実は私は桜があるのは日本だけかと思っていたのですが、先ほど小澤先生からもお話がございましたように、日本さくらの会のご努力もありまして、今、世界的に日本の桜が注目されつつあるそうです。外国の桜もちろんあります。フランスのシャンソンにも『サクランボの実るころ』という、とてもいい歌がございます。外国の桜はサクランボを食べるために植えます。実がなるわけですから当然花が咲くわけですが、小澤先生に教えていただいた話によると、それがこんなにも美しいものかと、日本に来た外国の方はみんな驚嘆されるそうです。

ところで今日も実は外国の方が一人お見えになっております。高知県佐川町の国際交流員ロミー・ジュアンナ・ミカコ・パワーズさんでございます。

パワーズさんはトロントという町からいらっしゃいました。カナダのちょうど真ん中にあります。オンタリオ州トロントです。湖に面したとても美しい町です。この後の交流会の時にでもお話を伺いたしたいと思います。

パワーズさん、日本の桜をご覧になったのは初めてだと思いますが、どういう風に思ったか、一言お話しただけませんか。

パワーズ とても美しいです。

泉 皆さん、桜を誇りにして下さい。そして桜を通じて国際親善を……。今、世界は色々難しい状況に入っていますが、桜を通じて争いになることはまずなくて、多分、仲良くなっていけるものと思います。また後でお聞きしたいこともございますので、そのときにお話ししたいと思います。

私は先ほど小澤先生のお話を面白いなと思って伺いながら、町づくりにはロマン、物語があるのではないかと考えてみました。例えばこれは北海道のお話だったと思いますが、『カムバック・サーモン—川にサケよ帰っておいで—』という運動をやった町があり、これは大成功でした。ところが現実には下水道整備に関する話だったというものです。やはり、『下水道を立派にしましょう』というだけではなく、そこには何かロマンがあるのだと思います。そうすると上越市のロマンは何か。そのロマンを皆さんで追求していくうちに町も立派になり、桜も増えてくる。多分そんなことを市長さんは考えていらっしゃるの

だろうと思います。

名古屋のお話で、名古屋というのは実に色々なことをやっていて、これを一言で言うのはなかなか難しいという話がありました。一般に、東京のそば、大阪のうどん、名古屋のきしめんと言われますが、きしめんというのは、うどんみたいなそばみたいな、ちょっと不思議な食べ物です。また、東京のまんじゅう、佐賀の羊羹、名古屋のういろうと言いますと、こちらは羊羹みたいなまんじゅうみたいな不思議な食べ物です。このように、ひと言では言い表せないのが名古屋の文化という気がします。

そういう風に桜一つとってもそれぞれの地域に合った育て方、桜文化の作り方があつたということ、先ほどの小澤先生のお話を伺いながら考えておりました。その辺で皆さんからそれぞれ個性的な町づくり、桜づくりのお話が伺えるものと、今日は大いに期待しております。

それでは市長さん、よろしく願いいたします。

上越市長・宮越 皆さん、こんにちは。多くの市民のご参加をいただきまして、このようにサミットが開催できますことを大変喜んでおるところでございます。実は今週は大きなサミットが今回のこのさくらサミットを含めて二つございます。もう一つは『ワールド・パートナーシップ・フォーラム・イン・上越』ということで、世界の18か国の参加が決まっています。大使、公使、あるいは参事官の方々が当上越市にお集まりいただいて、初めての国際会議を開くことになっています。その日まで桜も配慮してくれるとありがたいと思っています。

その前にまず本日のさくらサミットに参加していただいている北海道から九州までの市区町村を拝見してみますと、ちょうどバランスよく全国からお集まりいただいて、心から感謝とお礼を申し上げたいと思います。それから何よりもこの舞台装置を作ってくれている功労者である桜に対して、心からお礼を申し上げたいと思うところであります。まさに『桜花爛漫』という言葉がぴったりの雰囲気の中のサミット開催でございます。今、泉先生からまさにラッキーという感じのお話もありましたが、日にちを先に決めても桜がタイミングよく咲いてくれることは神業に近いわけです。しかし神業が実際に実現したことは大変喜ばしいことと思っています。

先ほど、小澤先生の講演の中で、日本人は桜が大変好きだというお話がございましたので、何故好きなのか理由を思い巡らしていました。まず美しさが他に比類なきものである

ことは当然ですが、その咲き方が一面に広がりを持って美しく、近くで見てもどう見ても美しい、だから好きなのか。あるいは、一斉に平等に咲き、一斉に潔く散る、このあり様も好きな花なのかなと思ったりしています。

また平和のシンボルにふさわしい花でもあるかなと思います。実はこの高田城は徳川家康の六男松平忠輝公が造られた城ですが、ここには石垣がなく土塁であり、これは戦のための城ではないという説があります。つまり平和のシンボルとして城が造られて、もう戦いはやめようではないかという思いが入っていたのかも知れません。石垣の城は戦いを前提にしたものですが、言ってみれば私どもが今日取り組んでいる町づくりということが、知らず知らずその中に盛り込まれて造られた城ではなかったかと、後講釈的に思っております。

そして城をめぐる城郭から、今の都市計画に負けないくらい計画性を持った町がつけられたことを思いますと、単にこれは戦乱の世に君臨するためのシンボルの城ではなかったのではないかと思うわけです。

そういった歴史の中で時代が変わり明治維新を迎え、高田の住民の方々が軍隊をこちらに誘致しようということで、市民が当時のお殿様から土地を買って、それを無償で軍隊に提供するという条件で13師団が入城ということになったそうです。まさに市民、住民手作りの町おこしのいい事例ではなかったかと思っています。そういう意味で先人に心から敬意を表したいと思っています。

その一環として入城を記念して明治42年3月に、桜は3月頃植えるのがいいそうですが、2200本の桜を城郭に植え、それが今日までつながっています。ですから80数年という時間が経過していますが、こういった先人の先見性を思いますと頭の下がる思いがいたします。私どもはその後正式に始まりました大正15年の第1回観桜会、そしてぼんぼりを付けて花見をしようという意図を持っての祭りを始めたわけですが、このことも後の人達の先見性が連綿と続いていることを思いますと、町をつくるということは大変な時間と先見性がないとできないのだなと深く感銘しているわけです。

桜は全国どこでもありますから、桜をテーマにした町づくりというのは、逆に難しい面もあるかも知れません。言わば差別化がなかなかできないということですが、全国に3232の自治体があり、それぞれの生い立ちがありますから、どこに桜が植わっていようと、その町の個性が生かされていくうえでは、桜は普遍的な愛される花木としてもっと普及されることを期待する一人でもあります。

それでは私どもは将来どういう町をつくるかということですが、何と言っても自分達が住む町です。自分達が中心となった住み良い町をどうつくるかということに立ち上がっていかなければいけないことは間違いないと思います。そんなことも視野に入れながら、実は昨年、上越市の将来のビジョンづくりを進めて、まさに市民との共同作品である『のびやかJプラン』、言わば30年後の羅針盤とも言えるマスタープランを手にしたわけです。

その中に城址公園を中心に桜をテーマとした町づくりもしっかりと見据えていこうということで、今、運動をしています。この城の桜は最初2200本でしたが、最近枯れたり欠損するということで補植等に努めて、現在3400本になっています。これは城郭の中だけです。それを基にでもう少しボリュームを上げて1万本の桜の植栽をしようということで、『1万本の桜が咲きほこるまちづくり推進委員会』を発足させているところです。

今日は全国から桜を自慢とする皆さん方がお集まりですから、皆さん方のことをどうこう言うわけではありませんが、私どもの町づくりを考えますと、そこを一つのコアとし、また桜をテーマにして町をつくろうというエリアも大変重要であると考え、そのような作戦、あるいは戦略を持って取り組んでいるところです。

時間の制約もごさいますので流れる的なことを申し上げたわけですが、観桜会も100万のお客様を安定的にお迎えできる環境の整備に努めていこうと思っています。昨年は115万人の記録を見たわけですが、これも天気次第とか、桜の咲き具合が土、日にぶつからないと大勢おいでいただけないわけです。しかしどんな場合でも安定的に大勢の皆様方が観桜会を楽しんでいただけるような条件整備にも具体的に取り組んでいるということを最後に申し上げまして、イントロの話にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

泉 実は私は先ほどからどういう順序でお話をいただこうかと悩んでおりますが、日本には『桜前線』という美しい、私の大好きな言葉がございますので、桜前線と同じように南から北に向かって皆さんにご報告をいただこうと、今、心を決めました。

私は色々な町にご縁がございます。高等学校の頃は一時角館高校にいましたし、本籍地は鳥取県の西伯郡でございます。花博では総合プロデューサーを務めまして、その時大金を投じた映写機が、今、国のお役に立っていると聞き、大変喜んでおります。考えてみますと、色々なところで様々な花や植物との出会いがあったなと思います。

これから今日のメインテーマである『住民参加とネットワーク』という形で進めていき

ますが、まずは住民の方々と行政とがどういう形でいい協力関係を作るか。もう一つは、例えば桜の花は、やたらに人が来ると土が踏みしめられて迷惑であるという話のとおり、管理がなかなか難しい。そこで、伝え聞くとところによりますと、盛岡の桜のメンテナンスにはリンゴの木の養殖技術を使うという工夫がなされているそうです。このように色々な意味で桜の木のメンテナンスあたりをテーマにし、それぞれの地域、あるいは町、村、市の首長さんからお話を伺いたいと思います。

それでは宮崎県北郷町から、ご報告をよろしく願いいたします。

**北郷町長・植野** 北郷町は宮崎県の中でも一番南の方で、どちらかというと鹿児島に近いところでございます。まだ少し残っているところもありますが、ソメイヨシノは既に散っていて葉桜になっています。

私の町は面積179平方キロということでかなり大きいのですが、その86%が山林で覆われています。そして私どもの町も桜の町日本一を目指して、昭和56年から桜の植栽運動を始めました。どちらかというと山林が多いのですが、この山林はオビスギがほとんどです。以前は船材に使っていたのですが、現在は船材がプラスチックの船に替わったため、オビスギの需要は非常に減ってまいりました。しかし、オビスギの需要が多い頃ほとんどの山を伐採して人工林に替えたため、以前あちこちで春になるときれいな風景を醸し出していた山桜の自然林はほとんどなく、現在はそれが寂しいと残念に思っています。

そういうわけで56年から市民が参加して桜を植栽しようということで苗木を提供して、それぞれ公共的な広場、公園、沿道など適当な場所に植栽をして、現在までに約1万8000本の桜の植栽を終わっているわけです。ところが、ただでさえ桜は育てるのも管理も大変だというのに、私の町は南九州の昔から言われている台風常襲地帯ですので、この対策が大変です。いい加減な支柱では倒れてしまいますし、成木に達するまでの管理が容易ではありません。

もう一つ問題なのは、公園に植えた場合ノウサギの被害が大きいということです。根元の皮をかじられて枯れてしまいます。それにも色々な対策を考え、おかげで北郷の町も桜があちこちに見られる町になってまいりました。今後もより一層桜の植栽をし、日本一を目指して頑張りたいと思います。

**泉** 台風の被害があるということについて、私はまったく予想もしていませんでした。大

変でございましょう。それぞれ地域地域のご苦勞があらうかと思ひます。

それでは熊本県水上村からご報告をいただきたいと思ひます。

**水上村長・成尾** 水上村は九州のほぼ中央になります。九州山脈の中にありまして、昭和37年に市房ダムができ、その周辺に植えた桜がメインとなって、現在、桜の里づくりをやっています。昭和59年に当時の細川知事による『熊本県の日本一づくり運動』が始まったのですが、そのとき中央町の石段と水上村の桜がトップにあがりまして色々な事業を行っています。そのときの目標が『地域のデザインづくり』ということで、桜をメインにした地域づくり、桜を生かした産品づくり、イベント、そして人づくりの4本柱で事業を進めて現在に至っています。

この中で現在、事業的には産品づくりということで木工品の加工品を作り、イベントでは地域の方々による『桜祭り実行委員会』もあって、そういう人達に主体性を持たせて事業を実施しています。

その中で失敗したのは、あまりにも行政が入りすぎて途中で住民参加がなくなってしまったことです。これではいけないということで、昨年からは、金は出すけれども口は出さないという方向で進め、規模的に祭りは少し小さくなりましたが、現在はスムーズに行っているようです。

水上村は山中にあり、よそからの入り込みが大変少ないので、それをもっと周知させようと様々なイベントを行ったわけですが、現在、遠くは福岡・長崎辺りからも桜を見に来て下さる方々がいらっしゃるの、そういうことで有名にはなっています。

うまくいったのはコメを『桜清流米』と命名して売り出したことです。標準米よりも3~4割高いのですが売れています。水上村の清流と桜という名前を付けて物を売っていくという方法が地域の活性化につながったのではないかと考えています。

現在、桜の管理は村民総出で手入れを実施しています。水上村の戸数は1000戸、3000人ちょっとですが、1戸から1人ずつ出でいただいて、桜の下草刈りを実施しています。これは年に1回、村民総出でやっていただいています。主体は地域の区長さん方に音頭を取っていただき実施するというで行っています。

ただ、テングス病が大変多いのが問題です。植えてからもう40年近くなりますので樹勢の衰えもあると思ひますが、それについては村の方で全部伐り取って焼くという方法でやっています。伐り取った枝についてもその枝を利用して『桜ハム』を現在試作中です。

泉 『桜清流米』という程ですから、とてもきれいな川が流れているわけですか。

水上村長・成尾 日本3大急流の一つと言われる球磨川の源流ですから清流であるということで、清流と桜と合わせて『桜清流米』という名前を付けてコメを売っているわけです。

泉 名前一つで売れますか。

水上村長・成尾 面積的には120~130町しか作っていないため、稀少価値という感じで売れているようです。

泉 私は熊本の球泉洞森林館をやらせていただきましたので、球磨川には大変お世話になりました。

それでは長崎県の大村市からご報告をいただきたいと思います。

大村市収入役・梅澤 今日は沢山の市民の方もご参加ですので、まず大村市とはどういうところかをご紹介します。大村市は長崎県のほぼ中央にございまして、長崎、あるいは最近では佐世保のハウステンボスなど観光地として有名ですが、実は世界初の海上空港が昭和50年に建設をされたという地でもあります。桜につきましては玖島城址に約2000本の桜があります。ソメイヨシノがほとんどですが、多弁の花、いわゆるオオムラザクラがあります。これは花卉の総数が60~200枚という桜で、昭和16年に長崎大学の先生が発見され、42年には国指定の天然記念物になりました。それで47年には市の花に指定をしております、桜については非常に愛着があるわけです。

今桜が固まって咲いているところは、玖島城址、それから300~400メートルの高台である野岳湖の2か所ですが、市の花が桜であるにも関わらず市内には少ないということで、3年ほど前から市民参加で桜を植えようと、企業、団体、個人に苗を無料配布して、今まで2500本程度配布しています。

大村市には園芸高校があって、その造園科においてオオムラザクラに対する論文、あるいはオオムラザクラの健全苗の育成、害虫の防除、公園の土壌改良などの研究がなされています。

これからは行政サイドばかりではなく住民参加を促すことで町づくりの意識が上がるのではないかと考えています。

泉 今までは行政が中心になっていて、市民の積極的参加はそれほどでもなかったということですか。

大村市収入役・梅澤 そうです。行政サイドの力が強かったようでございます。

泉 それでは高知県の佐川町からお願いいたします。非常にユニークな地質を持つ県という辺りもお話をいただければと思います。

佐川町長・和田 先程はカナダから来ております国際交流員のロミーの紹介をしていただきましてありがとうございます。私の町は高知市から西へ27キロのところでございます。文教の町佐川という名前で売り出しをさせていただいております。世界的な植物学博士の牧野富太郎先生も私どもの町から出ておりますし、今年1月16日に発表されたばかりの春の直木賞受賞者、坂東眞砂子も私どもの町の出身でございます。そういう意味からも文教の町として非常に誇りを持っております。

泉先生からも地質学の話がありましたが、地質学を始める方はまず高知県の佐川からと佐川の町を踏み出しに勉強をしていくということで、地質学に関する地質館等もございまして、多くの方々に来ていただいております。

桜につきましては実は今年は3月30日に満開になりまして、その後ずっと雨が降って、桜による町おこしを今年ではできませんでした。桜についての町おこしということですが、今日この場にもおいでですけれども、鳥取県の西伯町とはこのさくらサミットを通じて昨年知り合いました、それ以来この1年間色々な交流をさせていただきました。実は私、西伯町にまいりますけれども、15日には佐川町からも西伯町へ40名ほどお邪魔をしまして、経済交流、農業交流、そして子供を通じた町おこしをお互いにやろうということで交流を進めていく所存です。

皆様方、入口のところでこういう白いパンフレットを取られた方がいらっしゃると思います。私は佐川の町長の立場から言わせていただきます。一人でも多くの方に佐川の町に来ていただくことが私の仕事でございますので、このパンフレットをお持ちの方について

は、高知県においての際には、私どもの町の宿泊施設に無料でお泊めいたします。そのときは是非出て来て下さいませ。

さて、先程桜についての盆栽の話がございましたけれども、盆栽用の桜には牧野富太郎先生が佐川で育ったということから『稚木桜』というものがございます。これは盆栽で楽しむのに適して、1年目から花が咲くという大変珍しい桜です。このパンフレットをお持ちの方に限り、無料で私の方からお送りいたしますので、まだ受付にあればすぐ取ってきて下さい。そして帰りに私のところまで来て下さい。住所を書いていただければ必ず送らせていただきます。よろしくお願いいたします。

桜の名所につきましては、先程からソメイヨシノの名前が出ていますが、これは牧野富太郎先生が明治35年に東京の染井で発見された桜の種類です。そのソメイヨシノを高知県の佐川町に初めて送ってきて植えられ、それから桜の町佐川が発祥の地です。

また後程、色々な話をさせていただきます。お忘れなくこの白いパンフレットをお探して下さい(笑)。どうもありがとうございました。

**泉** 町長さんをご自身のところのPRがなかなかお上手だなと思って伺っていました。他の自治体の首長さんも負けずに頑張ってください。

それでは島根県の木次町からご報告をお願いいたします。

**木次町長・田中** 木次町は木を次ぐと書きましてちょっと読みにくいわけですが、出雲地方の中山間地ということ。私どもは今日のテーマである住民参加、関わり方についてあまり事例がないため、是非とも皆さん方のご意見をお伺いし、参考にして、勉強させていただきたいと思っております。行政と桜に関わる本町の思い入れ、また関係機関との関わり方をざっとお話し申し上げて、本町の説明にさせていただきたいと思っております。

木次町の場合、桜との関わりは昭和初期に始まっています。これは本町に流れます一級河川斐伊川の堤防の補強として植栽されたのが始まりです。水害の防災対策で桜との関わりがあったと思っています。現在は堤防2キロにわたって800本、樹齢70～80年という樹木であり、本町の観光の目玉が実はこの堤防の桜並木にあります。

48年に地元住民の方というか、行政主導でできたと言った方がいいのですが、『桜の会』が結成されています。現在、住民の皆さん方165名の会員を募って、桜の保全、保育等に力を入れるという事業を展開しています。

62年には、『桜咲く健康の町づくり』をメイン理念に掲げ、町の総合振興計画を策定しました。町民の皆さん方と、「何をベースに木次町のまちづくりに取り組むべきか」話し合いましたところ、「桜である」との大多数の意見に、それでは日本一の桜の町づくりをやりようということで、現在まで運動を展開してきたところです。

本日、上越市の桜を見せていただきますと大変素晴らしいもので驚いております。木次町は負けているのではないかと目眩すら覚えたくらいで、何とか木次町も頑張らなければならないという思いでいっぱいになりました。

町の総合振興計画を作りましたときに、町のシンボルマークとキャラクターとして『チェリーちゃん』という、アニメ化したマスコットを作っています。現在使い方はあまりないのですが、JRの方と公共交通機関の利用促進事業で日帰りのお座敷列車を編成しましたので、この電車の先頭にチェリーちゃんのキャラクターを付けていただいて、町民の皆さんに楽しんでいただいております。

63年には愛媛県の川内町と『桜咲く健康の町づくり』を契機にして姉妹提携をしています。またこの年に郷土芸能の桜太鼓を創設しました。これは木次町地元のジャズピアニスト世良譲さんに作曲していただいた太鼓を毎年披露させていただいています。

平成元年には、ふるさと創生事業に基づいた桜事業の推進と定住対策に重きを置き、若い人に何とか残っていただくということで海外研修の制度も作っています。ふるさと創生についても、木次町の隣町出身の元総理、竹下総理の発案で、桜に何とか期待を掛けているといった面もございます。

2年には『桜の名所百選』に選ばれています。またこの年には桜守、桜のお医者さんを設置して、害虫の防除、植栽の指導等を受けています。他にも苗木の無料配布、ヤマザクラの町行分取造林の制度も設置しています。2000年までに5万本を植栽しようという目標で、現在4万6000本ですが、これはヤマザクラが4万本、ソメイヨシノが5000本です。

また3年には地区の婦人会で組織をさせていただいて桜生産組合を作り、地元の桜にちなんで特産品の開発をしようということで、桜茶、桜煎餅、新しいところでは桜麺の試作を行っています。

5年には笹部新太郎先生が品種改良されたササベザクラの後継者久野先生を通じて、500本の植栽しています。この桜はヤマザクラが品種改良の基になっているとのことですが、現在本町ではバイオで増殖を図ろうと県の林業技術センターへ委託しています。成果はまだ見られていません。しかし、これを増殖しササベザクラを全国に広めていけたらと考えて

おります。

6年からは老人クラブの方に清掃と桜の保育管理を併せて行っていただいています。これが地元のボランティア活動の最たるものではないかと思っています。先般、建設省の表彰も受けております。11年間にわたる功績が認められたということです。

以上、木次町と桜との関わりをお話しさせていただきました。

泉 非常に細かいところまで大変面白いお話を伺いました。

小澤先生、今まで色々と皆さんのお話を伺って、例えば苗木を配って町民の方に植えていただくとか、どこでもおやりになっていることと、その地方、その町特有のお考えもあるようでございますが、3分の1済んだところで一言サジェスションをいただきたいと思えます。

小澤 色々お聞きしてまして、私が考えていた以上に、発想と行動がさすがにこのサミット市町村はすごいなと思いました。先程私は、私の本職である森林問題、林業問題、あるいは山村の活性化問題については極端に抑えて桜の話ばかりしていたのですが、実は首長さんの方々はどの方も、桜のことだけではなく、当然全体のことを考えて、それぞれの地域活性化のために取り組んでおられるということが一つありました。そこで、それならばということで私も、これはサジェスションではなく、むしろ私のお願いという感じでお話しさせていただきたいと思えます。

例えば木次町はアイデアと行動のオンパレードという感じで圧倒されますが、そこまで行うのはもちろん大変素晴らしいことです。これでしたら町民だけではなくて全国を引っ張っていけるぐらいの話ではないかと思えました。これをどうしたらもっと広められるのかという話も当然出てくると思います。今地域交流もおやりになるということでしたので、これは是非進めていただきたいと思えます。

私事で恐縮ですが、私は最近インターネットに凝っております、情報発信と交流をしております。老化防止にもなるだろうと思い、年甲斐もなくここ3年余りコンピューターと仲良くしてきて、とうとう自分でインターネットのホームページを2本立ち上げました。一つは森林フォーラム、もう一つは私の主催している『森林塾』のホームページです。『森林塾』ですが、実は自宅を開放してやっているものですからどうしても収容力に限界がありました。だんだん人数が増え、また高知県や長野県など遠いところからいらっしゃる方

もいるのでそれは大変だということで、インターネットを使って交流をやった方がうまくいくのではないかと、『森林塾』のホームページ、英語で言えば『フォレストスクール』のホームページを作ったわけです。ですから今、『フォレストスクール』と『フォレストフォーラム』の二つのホームページを持っています。

その中で感じたことは、これはうまくリンクしないとだめだということです。自分のことだけ宣伝しようと思っても大抵だめです。今、世界に何十万というホームページがありますから、こんなものを探して歩くのは実に無駄だし、出来ません。ですからお互いに連絡し合うとすごく伸びてくるわけです。例えば桜のホームページがリンクすれば、あっと言う間にかなり広がっていくと思えますし、交流とそういうものを結びつけていく方法が一つあるかと思えます。

それから佐川町で盆栽の話がありましたが、盆栽ということでしたら私にも少しございます。実は日本の森林で今大きな課題は間伐材の処理の問題です。間伐をしないと森林がうまく成長しない。ですから間引くわけですが、採算が合わないことを理由に山の中に放置されたままの間伐材が何と年間200万立法メートルもあるのです。一頃は割り箸はけしからんという話もありましたが、実は割り箸に使う木材の量は年間50万立法メートルです。割り箸に使う4倍の間伐材が山の中にあるわけです。これは資源政策上ももったいない話です。

そこで我が『森林塾』の面々に、これは建築家や教育家など、いわゆる林業とは無縁の方々の集まりですが、そこで話をしていたら、一人の方が大変素晴らしいアイデアを出されました。その間伐材を使って木の植木鉢を作ろうと言いついたのです。これは確かにやろうと思えばできることです。輪切りして中をくりぬき、出来た植木鉢には『土に返る木』という名前を付けました。その鉢を使って木を植えればもちろん盆栽になりますし鑑賞もできます。大きくなってきたらそれごと土に戻せば、木の鉢はそのまま肥料になるという発想です。実は昨年からはじめたばかりでして、まだこの辺までは話が伝わってきていないと思います。これからはこうした分野が面白いと思えますので、盆栽と木の植木鉢を結びつけていただくともっと色々な波及効果があるかなと思っています。

そこで、私はその方に、『森林塾』から出て行ってくれということで卒業証書を出したのですが、その方は独立すると静岡の御殿場に家建て、今度は『御殿場森林研究会』という会を作ったわけです。御殿場の市長さんとも今色々相談をして普及運動をやろうということです。特に、定年退職後の健康法にもいいという話から同好会ができて、私は最近そ



ここまで応援に行ってきたのですが、のみと金槌を使って中をくり抜いていくので適度の運動にもなり大変いいものだと思います。

これも木次町の話でしたか、桜守の話がございました。これは大変素晴らしいと思いましたが、そのことで思い出したことがございます。桜は病気にかかりやすいという話はもう随分したので申し訳ないと思ったのですが、私の行政最後の年に実は樹木医の仕掛けをスタートさせていただいたということです。樹木医というのは、今、全国で500人程おられます。こういう方々を大いに活用していただきたいと思うのですが、そのアイディアの発端になったのが出雲市と、これは後で分かったのですが北海道の帯広市が市独自の木のお医者さんを作っていたわけです。樹医と言っていたのですが、実はそのアイディアを譲っていただいた形になっています。それを全国版にしたいと思い、農林水産省、大蔵省にも申し出たところ、これが意外と簡単にOKと認められたわけです。

試験は結構きつらしいのですが、毎年100人近い樹木医が誕生しています。樹医を樹木医にしたのは、樹医と言うと獣医さんと間違いやすいと言われたためですが、発想の原点は地方自治体でして、それを全国版にさせていただいたというわけです。それで今桜守のお話を聞いてなるほどと思ったわけです。専門分化をだんだんしていくのだらうと思えますけれども、いいことではないかと思えます

5年前に森林問題を世界的に議論するというので、地球サミットがブラジルのリオデジャネイロで開かれたとき、私は日本国代表ということで行きまして、各国の方に樹木医の話を紹介させていただいたところ、外国の方々が非常に興味を持たれて、これは面白いと言われました。それで世界的に広げようではないかと言って見栄を切って帰ってきたのですが、そういうものを地道に広めていきたいと思っています。ですからそれが桜と関わってもいいし、病気の治療は桜以外の樹木の世界でもありますのでそういうものは広めて欲しいと思っていたところ、桜守というのが出たわけですが、もっと色々詰めていくと出てくるのではないかと思います。それが地域の振興にもなるでしょうし、桜なら桜を広めるということで今日は焦点を絞っているわけですから、そこを中心のお話ですが、そこから色々なヒントも出てくるということ、今までの話の中で感じた次第でございます。

泉 今、小澤先生からとても素敵なお話をいただきました。私も一つ付け加えさせていただきます。最近、植樹祭のマークが決まったのか決まろうとしているのか、小学校の5年生の女の子が作ったものですが、そのマークが素晴らしいのです。大きな地球があって、真

ん中に大木が1本描いてある。普通、植樹祭のマークはそこまでですが、その木よりももっと目立つように大きな魚が描いてあるのです。植樹祭のマークについて魚が登場するような世の中になったのかというので、これは実は環境問題をやっている者から言いますと非常に重要な考え方で、むしろ行政の方が一般市民に追い抜かれる時代が来たのかなと思って私は非常に感激しました。

今日もテーマは市民参加ですけれども、その辺まで広めて皆さんにお話し合いをいただきたいと思えます。

それでは次の6自治体にお話をいただきまして、そこでまた先生にサジェスチョンをいただきたいと思えます。鳥取県の西伯町からお話をいただきたいと思えます。

西伯町助役・中川 今日是我が町の桜にとって育ての親とも言えるボランティア団体『河畔クラブ』から2名の参加をさせていただいているところでございます。いづらか概要を申し述べさせていただきたいと思えます。

西伯町は鳥取県の西の端に位置しておりまして、隣は島根県でございます。町の面積は83平方キロメートルで、人口は8300人程度ですから、密度100人といたるところでございます。西伯町の北に鳥取県米子市が、さらにその北に境港市がございまして、漁獲高日本一という漁港がございます。余談になりますけれども、この境港市で今年の夏は『ジャパンエキスポ97山陰夢みなど博』が開会になります。県西部の今年の夏はこの開催により熱く燃えるだろうと思っているわけですが、泉先生にはこの博覧会の責任のポストに就かれており非常にお世話になってお聞きしているところでございます。大変ありがとうございます。どうか全国からたくさんのご来訪をいただきますように、この場からお願いを申し上げる次第でございます。

さて桜でございますけれども、西伯町の桜は昭和26～33年にかけてボランティア団体『河畔クラブ』や婦人会が中心となって植栽が始まってきたものです。今日では法勝寺公園の桜の名所として広く親しまれているところです。昭和45年3月に町花選定作業に入り、町民の公募により町の花を桜に決定しまして、これをシンボルとしてその育成に努めてまいっているところでございます。併せてこのときから春の花祭りが始まりました。そしてこれを契機に『河畔クラブ』によって新しい公園づくりが始まるなど、今日まで約2300本の公園の桜になっています。

さらに今日では色々な手法をもって桜を増やしています。ダムが平成元年に完成したこ

とを機に植樹祭等を行いまして、ダム対岸の沿道に1000本の桜を新植しました。なお併せてその付近にヤマザクラ2500本を植樹をしたという状況です。

二つほど特徴的なことについてご報告をさせていただきたいと思います。一つは桜と地域文化の関わりです。4月14日～15日にかけて全国でも非常に珍しい無形文化財の法勝寺一式飾りという伝統行事が行われます。この地方では富山県の福岡町の方に造りものという事で野菜を用いて造形するという風習がありますが、本町においては生活用品一式をもって造形するものです。これは法勝寺地区挙げての大きな行事です。そういう行事を併せ行うということにおいて、大変たくさんの方々にお越しいただきまして、町なり桜を理解していただいているという状況です。

次に『河畔クラブ』というボランティアグループの存在でございます。設立は昭和26年で、西伯町が桜の公園づくりを始めたその年になります。クラブの定数は16名。現在では58歳定年制で、毎月定例会を会員宅持ち回りで行き、自由な議論を通じて地域づくりに励んでいただいています。桜についてはほとんどこのクラブのお世話になっていまして、OB会員も含めて30人程度の皆さんに色々な面でかなりお世話になっているという状況でございます。一昨年はこの功績が認められまして、『全国桜の会』の表彰を受けております。

今日におきましては桜の写真コンテストを企画するとともに、公園中心部の桜350本の、言わばカルテの作成をして、それぞれ木に見合う管理を行っています。なお、今また色々な企画を作りまして、それらに向かって努力をしているということでございます。町としても今後は地域住民と一緒に桜の町づくりを進めていきたいと思っております。

なお、先ほど佐川町長さんからお話がございましたように、桜をご縁に交流を深めていく中で、『稚木桜』も頂戴をいたしておりまして、ダム周辺の非常にいい場所に植え成長を楽しみにしています。昨年の暮れにいただいた桜が今年花をつけたということで大変嬉しく思っているところでございます。

泉 次は奈良県の吉野町からご報告をいただきたいと思います。

吉野町長・福井 今日『桜のまちづくりと住民参加』というテーマをいただいておりますので、それに沿ってお話しさせていただきたいと思っております。

私どもの桜はもともと行政の植えたものでは決してありません。歴史的な話をすると長

くなるのですが、言い伝えでは約1300年前に役小角が大峰山山上ヶ岳で日本の国を救う仏様はどういう仏様がふさわしいだろうという行を1000日修行しました。そして最後に出てきた仏様が蔵王権現だったわけです。その蔵王権現のお姿をイメージのままに側にあった桜の木に彫りつけたのが蔵王権現像の始まりということになっております。そういう由来があるものですから、桜の木は蔵王権現の御神木であるということで、吉野山に桜の木が植えられるようになりました。

そしてその植えた人は山伏、あるいは蔵王権現を信仰する人達だったわけです。植えたのは山伏達で、山伏というのは行のために吉野へ来られますけれども、普段は都会地にお住みのため、育てる役割が必要なわけで、それは地元の吉野山の住民が行ってきたわけです。それはご来山いただいた山伏の行者さんと付き合うのと同じような気持ちで桜の木と付き合ってきたということになります。ですから住民参加も何も、住民がいなかったら桜の木は存続しないということになってしまいます。

ついでに桜の木はいつ頃から咲くのかということになりますと、役行者さんは1300年前の人ですが、実は日本の国の色々な記録の中で吉野は何回も出てくるものの、少なくとも『万葉集』や『懐風藻』には吉野の桜は一言も出てこないわけです。『懐風藻』では吉野の神仙の里としてのイメージ、あるいは『万葉集』には雪の降る吉野がたくさん出てまいります。桜と吉野を結びつけて詩に詠まれたのは『古今集』で3首出てくるのが最初で、これは1000年前です。吉野を桜と結びつけて有名にしてくれたのはその後の『新古今集』の時代になりますけれども、西行法師と源義経であると私は思っています。西行法師はたくさん吉野にちなむ、あるいは吉野の桜にちなむ詩を詠んでくれました。また吉野の桜にあこがれて吉野に住んでもくれました。

また源義経は桜とはまったく関係ないのですが、江戸時代になって『義経千本桜』という浄瑠璃が出来上がったことで、イメージとして強く結びついたのです。義経が吉野へ来られたときは冬でしたから桜は咲いていなかったはずですが、今でも『義経千本桜』を上演するとその興行は成功らしく、現在大阪国立文楽劇場では『義経千本桜』を久しぶりに通しでやっているらしいので、大阪へおいでの節はご覧いただきたいと思っております。その『義経千本桜』という戯曲があったから今度は川端康成が『吉野葛』という小説を書いたということがあります。

さて、それだけ長いこと桜と吉野の住民は付き合い、桜の名所であったわけですから、病気の類、あるいは桜の木に与える害虫の類はすべてを経験していると言っても過言ではご

ざいませぬ。テングス病、ヤドリギ、桜にまとわりつくツタ、鳥の巣の害、毛虫の類、ウメノキゴケ等あらゆるものがありますけれども、それでも5年程前に桜の状態がおかしいということで調査をしていただいたのです。そのときにナラタケ菌が入っているということで大騒ぎをしたわけですが、調査の結果はナラタケ菌が入ったからといって桜が衰退するというのではなくて、桜が衰退しているからナラタケ菌が入っているということが分かりました。もっと手身近に言えば、吉野山の住民の桜に対する手入れが不足していたという結果を示されることになりました。

昔は吉野山の住民はそれぞれ担当範囲を決めて、地域ごとに桜、あるいは桜の周辺の手入れを行っていたのですが、だんだん山へ入る人間が少なくなり、また急傾斜地で危ないということで山に入る代わりに金を出して済ませてしまう傾向が出てまいりました。その結果が現在の窮状にあるということです。

しかし金を出すとんでも金額が問題です。下刈りをするだけで年間一千百何十万か使っているわけで、それを人口1000人の吉野山の住民にあてがうわけにはいかないので色々なことをお願いしているわけです。その一つが小澤先生のお話にありました桜トラストの運動で、現在預託をして下さっている270人から4100万円を預金していただきまして、その利息分だけいただくことになっています。それと利息分に当たる同額を銀行から寄付とさせていただくことになっていますが、何せ今は低金利で、最初は2000万も集めたら年間200万の予定が達成されるだろうと思っていたのですが、4000万集まっても実際にもらえるのは50万ぐらいになってしまっています。

また桜トラストだけではなくて、もともと植えていただいた都会の人達のお助けをもらおうではないかということもあって、『吉野山保勝会』が桜の手当てをずっとしているのですが、保勝会の賛助会を作っていただくことになって、この春が終わりしだい賛助会の会員募集をすることになっています。その節はまたよろしく願いいたします。

泉 桜の文化というのは地域によってずいぶん違うものだということを感じたのは、実は吉野にお邪魔したときでした。他のところでは桜は植物の一種ですが、吉野では御神木で、むしろ神様的一种だということが色々な意味で産業にも文化にも影響しているということで非常に印象深かったことを覚えています。

それでは続きまして長野県の高遠町からご報告をお願いいたします。

高遠町長・北原 私どもは今日この高田へお邪魔するについて今朝6時30分に高遠を出てまいりました。私どもの町にある高遠城址の桜も今日は満開でございます。昨日は実数で4万1000人程の観光客が入りました。そういうわけで長野県の南のほうでございますが、今日ここへ着いたのが10時でございます。高速道の長野道が開きましたので3時間30分で高田まで来てしまいました。意外に高田は近いなという感じを持ったところでございます。

この高田城址とほぼ同じ時期に私どもの桜も満開になります。今年は10日程、満開の時期が早うございます。例年ですと4月20日前後が見頃という地でございます。標高が800メートルの山城の跡でございます。長いこと武田に治められていたのを織田に攻められ、その後落城して、徳川の時代になってから約200年近い経過を経て廃藩になったわけです。平山城という城ですが天守閣がありません。本当の山城で、自然の要塞を利用した地であり、そこに桜が植わっているわけです。

桜がこの城跡に植栽された経緯ですけれども、廃藩のために城郭が全部取り壊されて払い下げられてしまったものを、荒れたままでは惜しいということで、当時の近隣の人達が、昔、侍が馬術の教練をした桜馬場の並木にあった桜で何とか公園化しようと、自分達で城内に移し植えたのが高遠城址公園の桜の始まりです。

一番先に植えたのが明治8年と記録されています。したがって明治8年から昭和10年代頃までは近郷近在の人達の桜の名所として、いわゆる昔の遊びの場として利用されていたわけです。城下町であり、山の中の町であるということで、貧乏な地ですが非常に向学心に燃えています。というのは貧乏藩でしたので時の藩主が学問を薦めて、それによって城内にあった藩校で大勢の人達が勉強をし、地方へ出ていったのです。特に関東地方に多いのですが、町を出た人達が、「我が出身の地には素晴らしい桜がある」ということで、郷土を忍んで昭和8年から毎年観桜に来るようになりました。それがだんだんと口伝えで広がって、他の皆さんも観桜へ来るようになりました。昭和10年代から非常に多くの観桜客が県内外から来るようになったわけです。

不幸にして第2次世界大戦に突入して観桜の機会は忘れられていたのですが、戦中、ご多分に漏れず食糧増産ということで一時桜が伐られて畑地化されて、イモやムギを作られました。その後23年頃になって、これではいけないということで、世の中が落ちつくと同時にまた植栽を始めて、現在700ヘクタールの城址の中に1500本のタカトオコヒガンという純粋種の樹林をなしています。そのポスターをロビーに飾ってございますけれども樹林

でございます。東に南アルプスの主峰仙丈ヶ岳、西には中央アルプスの駒ヶ岳とその残雪と非常に眺望のいいところに立地していますので、最近非常に多くの皆さんがお見えになっているところでございます。そういうことで現在城跡が桜の名所になっているわけです。

住民参加ということですが、そもそも始めは住民自らの発意で植えられたわけです。戦後も青年団の皆さんが何とかして植えなければいけないということで、昭和22～23年にかけてひこばえを取って植えたものです。20年代の初めまではそういう形でまいりました。観光客が多くなったのは30年代になってからです。

先程、小澤先生からもお話がありましたけれども、とにかく桜は根本の土を人に踏まれるのが一番まずい。本丸のわずか残っていた20数本のうち、最初から植えた桜が30年代の半ばから衰えてしまい、何とかしなければいけないということで、当時大した知識はなかったのですが、たまたま農業改良普及員の人達と試行錯誤する中で、桜の幹に壁を塗るように赤土を塗り、こもで巻いて、腐ってしまった幹から何とか根を出そうと昭和40年代までやりました。そうしたところ幸いにして根が出て、その根が地中へ行って、何とか古木が現在も残っているということです。したがって元の幹は既に枯れています。実は台風のときに倒れてしまいました。

これは50年代の初めですが、私が奇しくも桜の係をやっているとして、兼六園へ観光旅行へ行ったときに古い松の幹をコンクリートで詰めてあったことを思い出したわけです。それでがむしゃらに1本の桜をコンクリート詰めにして、倒れた桜を元に戻して根を地面に誘導したという経過がございました。とにかくこのままにしておいてはどうしようもない。嫌地現象もありましたし、踏圧から何とか土壌を改良しなければいけないということもあったわけです。

そういうことで試行錯誤して研究しているうちに、たまたま農林省の高尾の桜見本園の責任者であった植村誠次先生に出会ったわけです。先生はそこを退職したあとパーク堆肥の指導をされていて、パーク堆肥を使って土壌改良を試みたらどうかという提案があって、公園中をトレンチに掘ってパーク堆肥で土壌改良しました。その結果、一気に桜の樹勢が回復し、そういうことが町民の関心呼びました。

しかし桜のために利益を受けるのはある特定の町民であるわけです。その管理のために町の一般財源を投入することはいかなものかということもあるし、財政も豊かではありませんので桜募金を始めました。来ていただいた方に桜の保護管理のために募金をお願いしますということです。これを昭和53～56年まで3年間やって、多くの方にご協力いた

きました。そういう中で何とか桜を守ってきたのです。しかしこのままでおくとこの700ヘクタールの土地にある桜がだめになってしまうということで、第2の桜の園を作ろうと、昭和62年から平成2年にかけて700ヘクタールほど新たな桜の園を計画するために土地を取得して、そこへ桜を植えることにしました。

まず平成元年には『花の丘公園構想』ということで、老人クラブから始まって各町の団体、町民総参加によって、約5ヘクタールの地に桜見本園の120種類程の桜を植えました。平成2年には県も興味を示してくれまして、県当局のご協力によって、『県民ふれあい植樹祭』という全県的なイベントをして、県下から1300人程の皆さんにお集まりいただいて、5ヘクタールの地に1500本のコヒガンザクラを植樹いたしました。

その後平成5年に、入学記念、結婚記念、金婚式記念、銀婚式記念とそれぞれ記念になることをネームプレートに記入する『メモリアル植樹祭』を計画しました。このとき2ヘクタール程植栽をして、新たな桜の園が7ヘクタール現在完成しつつあります。

小澤先生から嫌地現象のお話がありましたけれども、とにかく桜をかわいがる、世代交替を考える、桜に合った環境を作るということも、住民参加でやっていかなければいけないということで進めてきたわけです。

ただし、住民参加だけではどうにもなりません。そこで、57年から桜を見るために有料化ということでお金をいただいております。当初200円でしたが、今年から400円いただいております。これはただ桜を見るだけではなくて、城内にある進徳館という藩の学問所の見学、昨年新たにオープンした歴史博物館の桜シアターで高遠の桜を紹介したりして料金をいただいております。それを保護育成に当てていくということです。

現在桜守も常時4名おります。先達が残してくれた桜、しかも全国的に多くの皆さんに見ていただいている桜を末永く残していこうということで有料にしています。当然雇用の場もできます。そんなところが私どもの町の桜を管理するうえでの変わった形態ではないかと思えます。

もう一つは、年間を通じた桜の管理暦を作っています。大きく分けると、植栽から移植、施肥、土壌、防寒・暴風、あるいは病害虫の防除に分けて、何月から何月の間にはどのような作業するという暦がございまして、年間を通して管理をしています。

その他特産品についてはここに展示してございますけれども、今年は新たに『クリスタルフラワー』という、人工のプラスチックの中へ高遠のコヒガンザクラを凝縮したものを入れたものを作りまして、非常に反響を呼んでいます。今日は抽選で当たるように三つほ

ど持ってまいりました。ご覧いただきたいと思います。

北海道から沖縄まで全国津々浦々のお客様に来ていただいで楽しんでいただいでおります。この桜を中心に町づくりを進めているわけです。方々の市町村には町民憲章というものがあろうかと思いますが、私どもの町では昭和54年に『桜憲章』を制定しました。昭和50年には桜を町のシンボルにしました。シンボルにしたのも明治8年に桜を植え始めてからちょうど100年目が町政施行100年で、長野県でも一番早く町政が施行されたわけですので、その機に町のシンボルを桜といたしました。

町民憲章ができたのは桜憲章より後の昨年です。この町民憲章も非常にユニークであると私どもは自負していますが、この町民憲章のもとに町づくりをし、また桜も愛していこうということです。

最後にこの町民憲章を紹介させていただきまして私の話を締めさせていただきます。昨年の9月11日にできました。

『東に仙丈ヶ岳を仰ぎ、西に駒ヶ岳を臨む四季折々の美しい町。史跡と桜の城下町。高々とした町高遠。私たちは進徳館の学びの心を胸に、潤いと希望を満ちた未来を目指し、この町を愛し、平和を愛し、人々への愛を込めて高遠に明日をつくります。』

泉 まことに申し訳ありませんが、ご発表は手短にお願いたします。

では新潟県の加治川村からご報告をいただきたいと思います。

加治川村長・高橋 泉先生も時間のことでヒヤヒヤしているのではないかと感じましたので簡単に申し上げたいと思います。

新潟県内で今回のサミットが開かれたことにつきまして大変光栄に存じています。県内で地元上越さんと加治川村がサミットの会員ということですが、これからますます会員が増えていくことを希望するところでございます。

さて、我が加治川村は住民を巻き込んで『桜の里』づくりを始めてからまだ日が浅く、平成3年でございます。地元上越市のご年輩の方々のご承知であろうかと思いますが、かつては長堤十里と言われた加治川の桜は日本一もしくは世界一と言われた桜でした。しかし41年の大水害、42年連続水害でやむなく伐採ということになったわけですが、おそらく何十年間も日本中の皆さんの目を楽しませてきた加治川の桜も、水害のお陰でその責任が桜に転嫁されたことは無念であったらうと思っています。しかし時の流れで老木をもって根

が腐って、そこから浸水が始まって水害になったという専門的な立場からの指摘であれば、これまたやむを得ないのかなということです。

もう一つは、村内に日本一小さな山脈が走っています。標高399メートルの大峰山山系にヤマザクラが群生していて、40種類の桜が約1000本自然に生えたということで、昭和9年に国の天然記念物に指定されました。これを何とか保存して育てようということで立ち上がったのが『桜の里づくりの会』です。それに併せて建設省の事業として『桜堤モデル事業』ということで改修された加治川の堤に側帯堤を造り、そこに植栽していこうということです。これは新発田市を始め4か市町村で始まった事業で、昨年ようやく全部植栽が終わりました。植栽した桜の手入の経緯として里親制度をつくり1本2万円ということで募集しました。総数は個人で261名、法人で41事業所、県外からは42名の方々に里親になっていただいでおります。里親になっていただいた方々には、植栽された図面と写真を送っています。

このように我が村はこれから始まるという段階でございます。かつての長堤十里の世界一の桜に復元するわけですが、これから20年、30年がかかると思います。気の長い話ですが、後輩にバトンタッチをしながら立派な加治川堤の桜に育てあげていきたいと考えているところでございます。

泉 皆さんそれぞれの地域の思いもございまして、存分にしゃべっていただきたいのですが時間がちょっと厳しくなってきました。小澤先生にはひとわり終わってからご講評をいただきたいと思います。

それでは東京都北区のご報告をいただきたいと思います。

北区長・北本 時間の関係もございましてテーマにつきましてはお手元の資料でご覧をいただければと思います。そこで今私どもの方で取り組んでいることについて申し上げます。

私ども東京の北区は23区で一番北の方でございまして、所在は皆さん方が上越新幹線おいでになりますと、荒川を越えましてこれから東京というところで、西日暮里の地下に入っているところまで全部北区でございまして。皆さんがご覧になる東京は北区だということでご認識をいただければと思います(笑)。

そこで問題は、北区は全国的にはどこだということです。そこにございまして飛鳥山の方

はどちらかというと全国的にも有名です。この飛鳥山はご案内の方もおいでと思いますが、徳川八代将軍吉宗のときに吹上の江戸城の庭園から苗木を持ってきて植えて、12年経って一般庶民に開放したという、江戸庶民行楽の地ということで、今から280年程前にできた公園でございます。また明治6年に太政官布告で公園というものが制定されて5つの公園が指定されていますが、その中の一つが飛鳥山公園であるということで、歴史的にも大変古い公園でございます。

先程来、色々お話もございましたように、桜の寿命は50年ぐらいが盛りではないかと言われていますが、私どもの方も桜の世代交替がなかなかうまくいっていませんでした。途中戦争があった中で畑地にされたという話もありますが、飛鳥山の場合も駅寄りの崖のところ子供達の遊び場になったり防空壕が掘られたりという形で桜がだいぶなくなったということがあります。もう一つは東北本線がすぐ側を走っていたということで、機関車の煤煙のために枯れてしまったということです。

吉宗が植えたのは1270本と言われていますが、現在は600本足らずでまさに半減してしまっています。これを復元しようと思いましたが容易なことではありません。崖の崩れを防ぐためにスズカケの木などを植えましたが、これがまたべらぼうに育ちがよくて、今度それを移植するのに根回しをしたり大変でした。今は緑化の時代ですから簡単に伐採してしまうわけにもいかない。またそんな小さな木ではないということで、これの寄贈先を探さなければいけない。幸い交流のある群馬県甘楽町の方でスズカケの公園を造っているということで、そちらにもらってもらうことになり送り届けましたが、根を巻いてやるのに1年かかり、送り届けるのに経費も手間もかかるというので、その跡に直ちに桜の苗木を植えるというわけにはいかず、今そういった取り組みをさせていただいています。

併せて公園の整備もさせていただいて、第1期がようやく終わったという段階です。幸いに博物館ゾーンがございまして、そこに北区の郷土博物館を造らせていただいています。地下1階地上3階、延べ床面積5000平米ほどですが、併せて民間のご協力もいただいて、北区は王子がございまして、日本の西洋紙発祥の地ということで、王子製紙関連の日本の製紙会社全部で紙の博物館を持っていますが、それをそこに隣接して造っていただいて、もう建物はできています。

もう一つ、飛鳥山公園の一部の敷地に、日本産業の大先達の渋沢栄一が昭和6年11月に亡くなるまでおいでになって、戦争で焼けてしまった渋沢邸に渋沢資料館がございまして、この資料館も区の博物館と一緒に造ろうということで、現在、3館一緒に建設中で、来

年の3月に一緒にオープンさせていただくことになっています。そのために併せて大型バスなどの駐車場も整備をさせていただいているところでございます。

桜の木がいったんなくなるとこれを復元する、元の数に増やすということはなかなか容易なことではないということで、当面は800本を目安に、今、取り組みをさせていただいているところです。

先程の中国のお話では桜を何千本と植えるとのことでしたが、昔の桜の鑑賞方法は今とは違っていました。吉宗の時代は庶民の行楽・娯楽が非常に少なく、吉宗自身も娯楽と言えば鷹狩りぐらいしかなかったということです。桜の群落も江戸の場合は上野の山しかなかった。当時の桜の鑑賞は1本の桜の木を何とかの桜と銘打って鑑賞していたというのが一般的であったようです。それを吉宗が飛鳥山と墨田川の堤、中央の野原に桜の苗木を植えてから、今のように何千本の桜を一斉に鑑賞するようになったのではないかと思います。当時のあり方を考えると歴史的に鑑賞も変わってきているのかなと思っているところでございます。

時間でございますので、今、私どもはそんな取り組みをさせていただいているということをご報告させていただいて終わらせていただきます。

泉 今、経済学者の間では、吉宗というのは実は江戸の経済がだめになった後に、今で言うところの第3次産業を起こした名君ではなかったか。その実際の手段が実は桜の花見であったという説がございます。その辺に触れていただきましてありがとうございます。

それでは続いて埼玉県の手取市からお願いいたします。

幸手市代表・浜田 最初に幸手市の概要ですが、関東平野の中心部にありまして、埼玉県では北東部に位置して、茨城県と千葉県に接している市です。

桜としましては市内北部の権現堂堤がありまして、ここは約400年前に江戸を利根川の洪水から守るために築かれたもので、そこに約600本の桜があります。もう見頃は過ぎてしまいましたが、花のトンネルができるなど見所となっています。

先程来、鉢植え桜の話が出ていますが、私ども幸手市も鉢植えの桜を市民の方々に配っています。幸手市では『さくら10万本運動』を平成6年から開始しました。1人でも多くの人に桜の木を植えていただきたいと考えたわけですが、東京から50キロ圏内ということで団地やアパートにお住まいの方もたくさんおられます。しかしそういう方は木を植える

庭がありませんので、どうしたらいいかということで、鉢植えの桜に着眼して、出生者、婚姻届を出された方に配っています。

ただ配っているだけで追跡調査はしていないので、今後は追跡調査をしたり、また盆栽にいただいた方の展覧会を開催して、点から線に結び付けていきたいと考えています。

『桜のまちづくりと住民参加』の関係ですけれども、平成8年12月に地元住民の有志による『権現堂桜堤保存会』が結成されました。権現堂桜堤はシーズンには約60万人の観光客が訪れ、放置された多量のごみにより環境が荒らされるため、地元の有志が自分達が小さい頃に遊んだ土手を守ろうということで自発的に組織したもので、行政としても今後積極的に支援していきたいと考えています。

植樹関係ですが、市では『さくら10万本運動』を通して自治会館、町内会館等に桜を植えています。ただし植栽後の管理は地元でやっていただくということを前提にしています。

特産品の開発ですが、本日、皆様のお手元にお配りした『さくらほのか』という匂い袋がございます。現在商工会がアクションチームを組織しまして幸手市の特産品の開発を行っています。この他には桜の香りのするドレッシング、ルームコロン、お線香、お香もがございます。お線香は毎日あげるので販売ベースに乗るのではないかと期待しているところです。

これは直接的な住民参加と言えるかどうか分かりませんが、『さくら10万本運動』の一環として、『桜育成指定校』を作っています。これは市内の小学校にお願いして、年間を通して桜の学習活動をしていただくもので、この運動に地元の造園業者の方がボランティアで協力してくれています。これもまちづくりの住民参加になるかと思えます。

また、『桜保存樹木制度』を設けまして、保存樹木の奨励金として年間2000円の補助金を交付していますが、埼玉県内では珍しく桜だけを対象としている制度です。これも桜のまちづくりに関する住民参加の一つの形かなと感じています。

これも直接桜とは関係ないのですが、権現堂桜堤の土と桜の木の灰を使った釉薬で土鈴を作っている方がいます。権現堂堤ができるときの言い伝えに、たまたま通りかかった親子が人柱となり、それを供養する巡礼の碑がありますが、それが最近荒れてきましたので、作った土鈴を権現堂の桜まつりの期間中に販売し、収益をその修復費用に充てています。

桜まつり期間中、各商店街で湯茶の接待を自発的に行っており、現在4年目を迎えたところですが、『さくら10万本運動』の効果が徐々に浸透してきているという感じでございます。

泉 先程小澤先生から、「桜には匂いがないと言われていますが、意外と匂うものもあります」というお話がありました。これなど本当にその匂いがして意外に思いました。

それでは群馬県鬼石町のご報告をお願いいたします。

鬼石町長・関口 群馬県の西南に位置しておりまして、人口8000人、53平方キロメートルほどの小さな山間の町です。私の町では桜山という山があります。標高約600メートルの山で、ここにフユザクラが7000本あります。11月初旬から12月中旬にかけてまず1回咲き、そして春にもまた咲きます。昨日桜山に行ってみましたらちょうど花吹雪ということで、今年はずっとより少し開花が早く、また散るのも早かったなと思っております。

この桜山の冬のシーズンは40日間程ですが、その間だけで20万人以上の観光客がお越しになるかと思えます。昭和63年から平成3年度まで第1次整備を行いまして、それまで多くても500台程だった車が、今ではシーズン中、3500台はおいでになるようになりました。冬に7000本の桜が咲くということで、NHKをはじめ民放各社が毎年取材にまいります。売店等もたくさん出て大勢のお客様においでをいただき、地元として喜んでおります。

この桜山は、昭和29年に3町村が合併して鬼石町ができたとき、一つの旧三波川村が『三波川桜山保存会』を作り、管理に積極的に関わって下さったおかげで今日に至っています。今は4人の管理人の方に常時桜山の管理に当たっていただいているほか、町やあるいはボランティアの方等で桜山の管理に当たっております。

そういう桜山の特殊性から住民参加はもちろんです。これからさらに桜の町ということで、桜の植栽を全町に広げていこうと考えて、現在第2次整備計画を作成中です。

ところで群馬県は来年全国植樹祭を行います。私の町では53平方キロメートルの面積のうち林野率は80%です。戦後スギを中心に植樹をしてきたわけですが、今それらが成熟期に入り、伐期をむかえており、これが大変大きな問題となっております。町では知事が全国植樹祭を単なる一過性のものとしたくない、一時のイベントとして終わらせたくないと話をしておりまして、他のところで持ち上がりそうもないなら鬼石町が一肌脱いで、土地は用意するから木材のコンビナートはどうだろうか積極的に提案をしております。

実は4月2日～4日まで宮崎県へ視察に行っていました。元林野庁長官の松形さんが知事をお務めなのですが、その方のお話を以前ある本で読み、私は大変感動したということがございます。そこで是非、知事さんにお会いして森林についてのお考えをご指導願

たいと思っておりましたところ、それがついこの間実現をいたしました。大変お忙しい中時間を割いていただき、一晩色々お話を伺ったのですが、21世紀は森林化社会が来るという強い信念のもとに、森林に関して人づくりから生活環境整備、また産業の振興等々、本当に素晴らしい県土づくりを行っていると思いました。その柱に『国土保全奨励制度』を設けているというお話でしたが、林野率の高い鬼石町はまた水源地でもありますし、首都圏の水がめである下久保ダムを持っていることから、これから桜ももちろんですが、鬼石町の山をしっかり守るのは町のこれからにとっても、また首都圏にとっても非常に重要なことではないかと考えております。

先程、泉先生から、「地球があり、大きな山があり、その山よりも大きい程の魚を描いた小学生のポスターがどこかの県で植樹祭のポスターに取り上げられた。」というお話がありました。それは群馬県であります。実はそのポスターのことがこの間新聞発表になりました。その前に知事とお会いしたとき、「何かいいポスターがないかということで選考委員の方に選んでいただけたけれど、どうも面白いポスターがない。それで他のものを見せてもらったところ、こういうのがあったのですよ。」とそのポスターを見せてもらい、「これはどうだろうか。」と聞かれたのです。私が「これは面白いですね。」というお話をしたところ、「実はこれを全国植樹祭のメインポスターにしたいと思っている。」ということでしたが、そのようになりました。

これから私が常に考えなければならないことを1枚のポスターがすべて語っているような、非常に感動的なポスターで、そのうち全国にそのポスターが配られるのではないかと考えております。

群馬県では冬の目玉は温泉とスキーです。それ以外にはほとんどないわけで、そういう意味からも鬼石町のフユザクラは個性化そのもので、非常にありがたいと思っております。ちなみにこれは日露戦争の戦勝祝いにソメイヨシノを植えたつもりが、その中にヤマザクラとの雑種でできたフユザクラが混じっていたためだそうです。今は門外不出になっていますが、この間松形知事さんと夜、焼酎をご馳走になりながらお話ししているとき、「実は今宮崎県でも全国の桜を集めているけれども、鬼石のフユザクラを送ってこないか。」と言われ、美味しい焼酎と交換のようなことで私は約束をしまして、門外不出という掟が破られた次第でございます。いずれにしても桜によって全国が飾られるというのは楽しいことではないかと思っております。

泉 素敵なお話をありがとうございました。今のポスターは私も拝見しまして本当に感動いたしました。子供さんがこういう絵を描くようになったというのが非常に深い思いでございます。

それでは茨城県日立市からご報告をお願いいたします。

日立市長・飯山 今回のサミットには市役所の方から私を含めて3名、その他に桜のまちづくりの市民グループから代表の方々3名、合わせて6名参加させていただきました。テーマとして『桜のまちづくりと住民参加』ですが、このテーマはおそらくこれからも、このサミットの最も基本的な、大事なテーマであろうと思っております。行政の私どもだけが真ん中に座っておりまして、市民の方々が後ろに控えているのは申し訳ないという気持ちも味わっております。

日立市における桜のまちづくりの概要としては、資料の14~15ページにございますのでその方にお任せして、先程来、感じております点を3点申し上げさせていただきたいと思っております。『桜のまちづくりと住民参加』というのは非常に大事なことだと思っております。これは桜という切り口のみに限るわけではないわけです。日立の行政全般を見ても、福祉活動、文化・スポーツ活動、生涯学習活動、ごみ問題、環境保全の問題とより多くの市民生活各般にかかわっているということです。しかも桜という切り口を取り上げて、植物としての桜の面だけではなくて、環境、景観、文化、教育など非常に広がりのある分野に関係するわけで、決して一面ではないという捉え方のうえでも大変工夫が必要であるということ、皆さん方のお話を伺いながら、改めて感じたことが第1点です。

第2点は日立の桜についてですが、ある歌に『水戸の白梅、日立の桜』という言葉があり県内では結構有名ですけれども、桜の歴史を見ますと、当初は行政とは直接関わりなく、民間というか、企業の手で進められたというのが一つの特徴です。日立は工業の町です。日立鉱山からスタートして、今、ハイテクの町日立になっているわけですが、明治末期から大正初期にかけて日立鉱山には有名な煙害問題が起きました。その対策として日立鉱山が山林や社宅の周りにいくつかの種類の桜を植えてきた。その広がりが日立の桜のスタートだったようです。

そして戦災にあって、戦後戦災復興の様々な都市計画事業の中で、公園や街路に桜が意欲的に植えられてきた。そういうことで日立と桜は切り離せない関係にあり、桜の町になってきたという捉え方をしています。



3番目に、桜のまちづくりに対する私の基本的な考え方です。私は日本一の桜の町にしようなどという考えはございません。日本一とは何ぞやという尺度の問題、スケールの当て方の問題もありますが、私にはその考えはありません。ただ敢えて申し上げるならば、日本に一つしかないような個性的な桜のまちづくりは日立でもできるはずだと考えております。景観としては、桜のまちづくりは全国でそれほど差があるようなことにはならないのではないか。もしも差があるとすれば、そのまちづくりに住民がどう関われるのか、行政と市民がどう一体的にドッキングしていくのか、そういうネットワークづくりに関してで、その中でこれからどんどん知恵が出てくるはずだと考えております。そういう面での個性的な、日本に一つしかない特徴的なあり方はできるかもしれない。そういうことで市民の皆さん方といま一生懸命知恵を集めているところでございます。

日立市は市民運動が非常に盛んな町で、福祉問題や生涯学習、あるいは文化活動についても、あまり大きな輪にはなりません、とにかくいいことは何でもやってみましょうと、比較的小回りのきく市民運動が盛んでございます。そういう延長線上でいくつかの成果も上がってきています。この桜のまちづくりに関しても、今日一緒においでいただいている『花樹の会』、『さくらのまちづくりを進める市民の会』の皆さん方の中には市役所の職員以上に専門的な研究を深めておられる方もいますので、そういう方々と一緒に、行政の果たすべき役割、あるいは市民の方々ができる仕事をお互いにきちっと仕分けをしながら、皆さん方のまちづくりも参考に、少しずつ展開していきたいと思っています。

泉 素敵なお話をありがとうございました。お話を伺って、日本一でなくてもいいとおっしゃったときはどういうことになるのかなと思っておりましたら、とても素敵な結びがございました。

それでは秋田県角館町のご報告をお願いいたします。

角館町収入役・佐藤 桜前線の北上から申しますとお隣の宮城県柴田町さんの方が先ですが、席の関係で私の方からご報告させていただきたいと思っております。

東北の秋田県というはずいぶん遠いという印象を皆さんお持ちでしょうが、つい先だって秋田新幹線が開通いたしまして、大宮までは乗り換えなしで3時間で来られるようになりました。気軽な気持ちで、皆さん、おいでいただきたいとお待ちしております。

私は昨日出掛けてきたのですが、朝のテレビでお隣の宮城県柴田町の桜のニュースがご

ざいました。それを見ていたら窓の外では雪が降ってきました。夜が明けてからみるみるうちに雪が積もって、出掛けるときには10センチほど積もりました。今年私どもの方では例年より少し早く20日から観桜会をしようということになっているのですが、こんなに急に雪が降ったりするものですから、いつになったら桜が咲くのかと本当に心配しています。

よく観光担当の係に、「おたくの桜、いつ頃咲くんですか。」という問い合わせがあるのですが、的確な返答ができなくて戸惑っています。過去の例を見ても、早いときでは4月13日に満開になったときもありますし、遅いときは5月9日と、1か月も幅があります。最近では温暖化ということで比較的早くなっているような感じはしますが、統計というものでもないのですが比較してみると、必ずしもそういった状況にもなくて、去年は5月のゴールデンウィークに開花しているということで、開花時期の予測に戸惑いがあります。今日の上越市は満開で、こんな日に行事ができるなんて本当にうらやましいことです。

私達の町では、桜は武家屋敷通りの桜と川堤の桜二つありまして、これを静と動と申しますか、2面の桜形態とご紹介したいと思います。武家屋敷の桜はまさに静かな佇まいの中にある趣のある桜通りです。ここにお花見に来られる人には、風情を楽しみに来られます。そこから100メートルぐらい離れたところに川堤があって、こちらは花の下で酒盛りをされる花見客がいっぱいおられます。こういう2面の表情を持ち備えた町が我が町の桜という風に皆さんにご紹介申し上げたいと思います。

もう一つ忘れてならないことで皆様にご紹介申し上げたいことは、私どもの桜担当の職員がおそらく町村の中で初めて樹木医の試験に去年合格したということです。桜の管理にとって一番大事なことは桜をよく見る、調べるということですが、桜管理の全責任を持っています。そういうことから桜の管理については一安心と申しますか、彼におんぶにだっこになってしまっています。

今日のメインテーマである住民参加につきましては色々言えると思います。一つには町内にはたくさん桜がありますが、桜はもちろん病気にかかることも、葉が散乱するといったこともあるわけです。そういうことに苦情を言わないでみんなが桜を愛してくれるということも、一つの住民参加という捉え方ができるのではないかと思います。

また川堤の桜を見るために環境をきれいにしようと、みんなが参加してクリーンアップします。このときは1000人程の町民が出て桜堤のクリーンアップをします。考えてみますと、これも桜のまちづくりのための立派な住民参加と捉えられると思います。

もう一つ、『桜ウォーキング』という、健康づくりのため、桜並木の下をみんなで語らい

ながら歩こうという行事もしています。これも最初は町内の人間だけで行っていたのですが、最近は隣の県の人達も参加してくれるようになりまして、1000人程の人が集まるようになりました。こういったことが桜の町に対する町民の皆さんの参加の姿ではないかと思えます。

私どもの樹木医の黒坂君に、「樹木医の免状を取ったのだから、今まで難儀していたテングス病なんかはたちどころに治療できるのだろうな」と言ったら、「いや、そんなことはできない。今まで通り枝を切るしかない。」と言うわけです。それで、「何だ、そんなお医者さんの免状をもらってきて、まだ外科治療しかできないのか、内科的な治療ができるようになる勉強はしてこなかったのか。」と言ったのですが、これは無理な話のようでございます。テングス病は将来とも枝を切らなければならないというのは不安なことです。幸い元林野庁の先生もいらっしゃいますので、たくさん予算を付けていただいて、テングス病の内科治療ができるような対策を取っていただけると大変ありがたいと思えます。

泉 最後は非常に具体的なお話がございました。

それでは宮城県の柴田町からご報告をいただきたいと思えます。

柴田町助役・鈴木 今日のメインテーマは『桜を生かした町づくり』ということです。このポイントは、『桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望』という問題に集約されると思えます。

住民参加については、先程小澤先生が紹介されました『柴田町さくらの会』がまさに民間活用の最たる団体ですが、この団体は昭和53年にわずか14人で発足しました。それから19年、現在120人です。人数的には少数ですが、このさくらの会を中心とした『ボランティア友の会』が町にありまして、こちらは1000人を擁しています。この1000人の中の300人ぐらいがさくらの会に同調して、テングス病の防除、アメリカシロヒトリの駆除、施肥、枝切りといった労働に従事してくれていることは、非常にありがたい話です。

さくらの会で先程紹介がありました中島亮祐さんは自衛隊の出身で、自衛隊時代からも『ボランティア友の会』会員として一生懸命ボランティア活動を行い、またさくらの会の副会長も務め、桜との出会いは25年ぐらいになると言われています。そしてこの4月4日に『日本さくらの会』の会長であります衆議院議員議長の本県出身の伊藤宗一郎先生から表彰されたという内容であります。

この会は町内外の方を対象とし、その方々に、入学、結婚、就職、銀婚式、金婚式とそれぞれ記念日があるときに6000円をいただいて苗木を植えて、その苗木にプレートを下げます。6000円出せば肥培管理から表札立てまでと、後まで全部面倒をみるということになっています。この団体によって昭和53年から平成8年まで1060本、1年に50~60本植えているわけですが、この会が1000本を達成した機会に、これから2000本に向かって進んでいこうという確約がなされました。

私どもの桜の木々は植栽が明治40年ですから、もう100年になっています。その頃の貴族院議員の飯淵さんが船岡城址の三の丸に約80本植えたと言われていますが、その老木はまだまだ花見はできる桜ですが、かなりくたびれています。そのために補植やら何やら現在やっているというのが現状です。

この船岡城址三の丸の跡の他に、一級河川白石川の河畔に現在1000本の桜が植えてあります。これがいわゆる『一目千本桜』ということで今満開でございます。11日からJR東北本線の船岡駅と大河原駅の2キロの区間は列車のスピードを落として、列車の中から花見ができるようにしています。スピードも通常の半分の25キロで走って、花見をしながら通学、通勤、旅行ということになっています。

平成9年2月の定例会で『さくら基金条例』を設置しました。この目的は、柴田町の町花である桜の育成管理を図り、長く後世に伝えるためのものです。いち早く『柴田町さくらの会』では、平成9年度の予算で123万4567円の寄付金を基金の方に寄付しています。目標は1億円です。1億円あればこんな低利が長く続くわけでもないし、やがては5%ぐらいになるだろう。そうすれば500万円ぐらいの利子が出るので、それで桜の育成管理を図り、立派な桜を後世に残そうではないかという趣旨の基金条例です。

当然町としても平成10年に500万円前後出して行って、ゆくゆくは1億円を目指していくということにしています。

その他住民参加に対しては、花見の後始末が頭の痛い問題ですが、町では環境美化条例とごみの持ち帰り運動、町内会の参加による清掃の実施、ごみ箱の設置等々を図って環境整備を一生懸命やっているのが現状です。

町の方では、『お誕生桜苗木の配布』ということで、平成4~8年度までに約700本配布しています。1年に平均150本前後ですが、こういうこともやり、補植もしなければなりません。このようなことを行い、桜の育成を図っているということです。

最後に一つ、お願いがあります。私どもの町船岡城跡は、50ヘクタール程の四方山にあ

りますが、この山を全山桜の山にしたいというのが町長の夢であります。そこでさくらサミット加盟自治体の皆さんの同意を得ながら、この桜の植樹が円滑にいくように、お互いに桜を交換してもらえようようにしていただきたいということです。それぞれ特色のある桜がありますし、寒いところ、暖かいところと色々あるわけですが、それとても大した支障はないのではないかと。あるとすれば林野庁当局に聞けば分かるのであって、それらを参考にしながら加盟自治体でそれぞれ桜の苗木の交換を行って、日本中にある桜がその町に行けば見られるということになれば非常にいいことだと思っていますので、ぜひご賛同を賜りたいと思います。よろしく願いいたします。

泉 それでは北海道の静内町のご報告をいただきたいと思います。

静内町長・増本 私どもの北海道ではまだ桜が咲くまでに1か月時間がありますので、ゆっくりお話をさせてもらいます(笑)。昨年は私どもの静内町で第8回のサミットを開いていただきましたが、桜は咲かない、雨は降るで皆さん方には大変不満足な思いをさせたこととまことに申し訳なく思っております(笑)。この席からお詫びをさせていただきます。

私どもの町は桜ばかりでなくて、競走馬でも全国に名前を売っています。昨年天皇賞や有馬記念を勝ったサクラローレルも静内町産ですし、また暮れにはラムタラという総額45億の馬を外国から輸入しました。世界のトップクラスの馬ですが、これも静内町に係留されているというのが現状です。よく言われる言葉に「競馬の予想と桜の開花日はよく外れる」というのがあります(笑)。昨年手違いについても馬の産地だということでお許しをいただきたいと思います(笑)。

そういうことを踏まえて今年のサミットは満開の日と合致したということで、上越市の慧眼には改めて敬意を表させていただきます。

桜の開花日を的中させるということに関しては、私どもは大変苦勞しています。ごく最近になって、林業試験場の詳しい資料をベースにして、かなり精度の高いものが予想できるところまでこぎつけています。昨年は実質的には5月12日にプラスマイナス3日と出ていたのですが、1年先に決められるものですから、5月9日、10日になったわけです。今年はずっと正確に5月4日～9日前後だろうと言われていました。75%ぐらいの確率だと言われていたので、こういったものをベースにしながら、的確な開花日を予想していくことがお客様を招致するにはいちばん肝心なことだろうと考え、そういう取り組みをさせてい

ただいております。

私どもの桜は大正5、6年当時、二十間道路を宮内省が造って、その領域に植えたものですが、植えた翌年から花見ができたと言われていました。したがって樹齢20～30年くらいのもを持ってきて植えたと私どもは捉えています。当時の宮内省でなければできない仕事でしたが、それだけに平均すると樹齢100年を超えている木が多く、この保存に大変苦勞をしております。

そういう中で平成4～6年に1本4000円の診断料をかけて樹木医を招聘し、桜の台帳を作り、その台帳に基づいて平成7、8年の2年間で最高5万円、平均2万4000円の治療代をかけ、総額で2800万円、700本の木を治療しました。腐食部分に充填剤を詰めてプラスチックで被覆をするという技術ですが、こういうことをしながら桜の寿命を延命していくという努力をしています。

また新しい取り組みでは、花つきが一番いい木を選定してこの茎頂を取り、専門機関に委嘱してバイオによる苗作りを平成6年から始めました。昨年は失敗して、1000本の依頼が200本しか成長できなかったという報告が来ています。本年はその失敗例を参考にしながら1000本の苗を作るという約束もいただいています。

住民参加については、昭和37年から『桜並木保存会』と言われるボランティアグループの努力によって今まで維持されてまいりました。最近では観光ボランティアガイドサークルといったサークルができて、60名程ですが、受け入れ体制の整備をするといった取り組みもしています。

また桜をメインにした特産品、あるいは商品を利用した桜の宣伝を町ぐるみで行っている状況です。

いずれにしても一番大きな問題は、「最近、植えた木が順調に育っていかない。自然環境に異常があるのではないか。」と言われる状況があることと、「木が枯れていくのが目立つ。」ということです。先程来、樹木医の話が出ていますが、今後樹木の診断技術が充実されていくことを期待しています。

泉 小澤先生、お待たせいたしました。今、伺いました皆さんのご報告に対するご講評をいただきたいと思います。

小澤 終盤になるほど盛り上がってきたなという感じでございます。講評などというよ

うな観点ではないかもしれませんが、今日のサミットにおける皆様方のご熱意にむしろ感動したという観点から、若干のコメントをさせていただきます。

先程フユザクラの話が出ました。これは数種類あるようですが、秋と春に咲くから2期咲きの桜と言われましたり、十月桜と言われましたり、いくつかの名前が付いています。実は私は十月桜を盛岡の方からいただきまして、鉢植えてベランダで育てています。盛岡では10月が見頃であったらしいのですが、東京に持ってきましたら正月にちょうどいい。正月に桜を鑑賞しながら年を越せるわけで、これはなかなか素晴らしいものです。是非フユザクラをあちこちに普及させていただきたいと思います。

今日のメインテーマの住民参加についてですが、住民参加と言いますと、まずイメージとしてボランティアというのが頭に浮かんでくることと思います。しかし桜に関して言いますと、本数も増えてきており、だんだん専門的な事項が出てくるわけです。ですから一つ申し上げたいのは、一般の参加はもちろん進めていく一方、専門家集団による非営利活動を並行的に助長していただきたいということです。病気の問題もありますし、町づくりという観点から関連して川の浄化まで入ってくる時代です。専門分化をしてきたときのこれからのあり方として、専門家集団にボランティア的精神の集団として非営利的に、例えばコミュニティ改善とか、桜でしたら桜の問題に当たっていただく。あるいはそういうグループの方々が出てこられましたら話を聞いてあげるということをやっていただければいいのではないかと考えています。

私も心理問題で非営利型の活動をこれから目指していこうかと思っておりますが、これは最近NPO（ノンプロフィット・オーガニゼーション）と言われてます。専門家ですからまったく無料というわけにはいかないのですが、営利を目的にはしない、そのような性格のものが今後出てくるのではないかと考えています。

例えば桜の病気だけでも47種類もあると言われてます。今まで研究所の方で分析したところ、そのくらいのもが今まであったそうです。もちろん、テングス病が一番目立つわけですが。治療技術の進歩は今後あると思いますが、同時に環境問題解決のため環境を改善してやらなければいけないという分野もあります。また育種の分野も絡んでくると思います。そういうことでどうしても出てくるのが人材の育成で、それにもつながってくるわけです。

人材の話で申し上げますと、先程宮崎県の松形知事さんのお話が出ましたが、私はあそこで大変感銘を受けたことがございます。これこそ全国で初めてというものが3年前にでき

ました。それは五ヶ瀬という山奥の町ですが、中学と高校を一貫教育する6年制の県立学校ができたのです。日本では県立の高校は全国にいっぱいありますが、県立の中学は全くありません。国立大学付属の中学はありますが、県立はないわけです。これを作るのに知事さんはずいぶん苦労されて、全寮制の6ヶ年間一貫教育が3年前にできてようやく開校したところ、実は全県下からすごい応募者がありました。

もともと偏差値を追放しようという観点でやったものですから、ペーパー試験でやるわけにいかず、その選抜に大変苦労したわけですが、そういうユニークな学校が、しかも山奥にできたわけです。それは素晴らしい森林の環境の中で教育するということですから、それだけ人気も高いようです。いずれにしても人材がこれから出てくることを我々は願っているわけです。

もう一つ、今日はカナダからもはるばるいらっしゃった方がございますけれども、私は去年の9月にカナダに森林関係の勉強に行っていました。BC州は大変森林の多いところで、そこにキャスルガーという、人口1万人ぐらいの小さな町があります。そこにセルカークカレッジという大学があります。1万人の町に立派な大学があるのですが、その町の方に、「日本にこういう大学があるか。」と聞かれました、「いやあ、日本では1万人の人口の町だと大学まで行かないけれども。」という話をしたのです。そこには森林の専門学科もあって、日本人も行っていましたが、世界中から人が集まって勉強していました。これは素晴らしいと思いました。そういう環境のいいところで人づくりをやっていることに私は大変感動し、そういうものをこれからは是非増やしていかなければいけないと思って帰ってきたわけです。ですからやる気があって、そこに知恵が出れば色々なことができるのではないかと申し上げておきたいと思います。

桜情報につきましても出ましたが、多摩の森林科学園からインターネットで桜に関する情報を詳しく発信しています。桜の開花時期などについても大変興味深いものを出していますので、サミット関係の皆様方も是非情報発信とか情報交流にこれから心掛けていただければ、さらにもう一段、住民参加も含めて進展してくると思っています。そういうことでぜひ皆様方、頑張ってくださいと思います。

最後に、柴田町の四方山の構想実現に皆様、ご協力してあげて、是非町の希望を実現させてさしあげたらいかがでしょうか。以上で私の話を終わらせていただきます。

泉 時間もございませんが、ここで上越市長さんにごく簡単にお礼と感想をお願いいたし

ます。

**上越市長・宮越** 市民の皆様方もお聞きになられて、日本には色々なところで色々な桜があり、また色々な町づくりを行っているということがよくお分かりいただけたかと思えます。そして桜はまったく平等に南から北へ順次桜前線に従って北上して、みんなを楽しませてくれる花だと思いますと、本当にこんなに素晴らしい花はないなと思った次第でございます。まさに日本の花、日本の花木と言っても過言ではないと改めてこのサミットで感じたところでございます。

それぞれの町で、住民参加による町づくりの核として桜が息づいているということをお考えですと、大変意義深いサミットではなかったかなと思っております。大変ありがとうございました。

**泉** これで私の役目は終わったのですが、最後に私が気がつきたいいくつかの面白い言葉だけを申し上げて、これをキーワードに是非頑張ってくださいと思います。

一つは、桜の町というのは意外に若いということです。100年というのがありますし、ごく最近というのがあります。若いということは経験はないかも知れませんが、将来に非常に可能性があるということを感じました。

2番目は、どういう桜を選ぶかということです。フユザクラのお話が出ましたけれども、樹種の選定が一つのキーポイントかなと思います。順不同ですけれども、先ほどNPOのお話が出まして、ノンプロフィット、利益を追求しない人達の協力が大事だなと思えました。とは言うもののやはりお金が大事で、このお金には4つあると思います。1つは基金、トラストです。基になるお金を何とかして作って、それを運用する。2番目は寄付で、これも非常に重要です。3番目は入場料を取るということです。入場料を取ったら人が増えたというお話がありましたけれども、入場料という取り方もあるし、ボランティアも基金の一種だと私は感じました。お金は出さないけれどもボランティア活動でお金に相当するものを出す。それも含めて実は様々な参加があるというご指摘がありました。

お金を出す参加、行動で参加する。私が非常に面白いと思ったのは、不平を言わないという参加もあるというお話で、なるほどなと思えました。

それから交流会というか、人づくりというのは結局人と人との出会いだなということをお私先程から感じていますが、その中でも特に電子メディアの時代のインターネットの重

要性が何回か指摘されましたので、これも記憶に留めておきたいと思えます。

それから非常に印象深かったのは、皆さん、時間がないから言うまいとしながら関連施策へのお話がやはり出たということです。これはつまり、単に桜だけではなくて、桜のまちづくりをベースに地域全体をいかに発展させていくかということ、絶えず首長の皆さんは考えていらっしゃるということに、私は非常に深い感銘を受けた次第でございます。

最後にあそこに飾ってございます桜の押し花芸術は素晴らしいと思えました。私も東京芸術大学の卒業生でありますからいい加減なことは言いませんけれども、あれは育てていけば大変面白い芸術のジャンルになるということをお申し上げまして、ここで司会の方に譲りたいと思えます。どうもありがとうございました。ご協力感謝いたします。

**司会** それでは本日の事前会議で採択されました、第9回さくらサミット in 上越の共同宣言を上越市長から発表していただきたいと存じます。

**上越市長・宮越** 本日は大変貴重なご意見やら実情をお話しいただきまして心からお礼を申し上げたいと思えます。最後に自慢話ではありませんが、私どもの高田城の観桜会の特徴を申し上げます。日本3大夜桜ということで、これから1600のぼんぼりがお濠に映え、また桜と調和の取れたところが売り物で、これから是非ご覧いただければと思います。

それでは先程の会議で採択されたサミット共同宣言を読み上げさせていただきます。

「第9回を迎えたさくらサミットは全国から17の自治体が一堂に会して、新潟県上越市で開催いたしました。桜は日本の心の象徴であり、古来から文化や精神の創造に深く関わってまいりました。この桜を育て、守るということは私達の永遠のテーマであり、そのためには地域住民の皆様の積極的な参画がなければ、21世紀に素晴らしい形で残すことは大変困難であります。その意味で今回のサミットは、『桜のまちづくりと住民参加』をメインテーマに掲げて、桜の保護育成に関わる情報や、住民と行政が共同し、桜を通しての町づくりを展開するための方法論や組織のあり方などについて意見交換を行いました。

今後さらに行政と住民が理解し合い、より強固な体制を作りあげ、桜を次世代に伝え続けるため、さくらサミットは一層コミュニケーションとネットワークの強化を図り、サミットから全国へ、そして世界へ桜情報を発信していけるよう取り組んでいくことをここに宣言します。

平成9年4月13日。第9回さくらサミット in 上越参加自治体、北海道静内町、宮城県柴

田町、秋田県角館町、茨城県日立市、群馬県鬼石町、埼玉県幸手市、東京都北区、新潟県加治川村、長野県高遠町、奈良県吉野町、鳥取県西伯町、島根県木次町、高知県佐川町、長崎県大村市、熊本県水上村、宮崎県北郷町、そして新潟県上越市。

第9回さくらサミット in 上越、開催地代表上越市長宮越馨。」

**司会** それでは引き続きまして、サミット事前協議会におきまして決定されました、平成10年第10回の開催地につきまして、宮越市長より発表していただきたいと存じます。

**上越市長・宮越** それでは発表させていただきます。

記念すべき第10回の開催を東京都北区さんをお願いいたします。

**司会** それでは北区の区長でいらっしゃいます北本区長、壇上の方においで下さいませ。

それでは宮越市長と次期開催地でございます東京都北区北本区長の固い握手によりまして、引き継ぎをお願いしたいと思います。次回の開催も皆さんからの素晴らしい活発なご意見を交わされることをご祈念申し上げます。

それではここで次期開催地でございます東京北区北本正雄区長よりご挨拶をいただきます。

**北区長・北本** 次回の第10回さくらサミット開催地のご決定をいただきました東京都北区区長の北本でございます。第10回という大変記念すべき年に開催地をお引き受けさせていただきまして大変光栄に存じますとともに重みを痛感させていただいております。有意義なさくらサミットとなるように私ども努めてまいりたいと思います。

私どもは桜の名所ということでは江戸時代からの飛鳥山がございます。その他、区内各所に名所がございます。また施設見学等については西洋紙発祥の地で、紙に関連して大蔵省印刷局の滝野川工場、あるいは王子工場もございます。ここでは皆さんがお使いになっている1万円札やお札の印刷、さらにははがき、切手、パスポートを印刷しています。ただこれをお土産にというわけにまいりませんので、この辺が残念なところがございます。いづれにしても、施設もご見学いただく場所も用意できるのではないかと考えております。

あとは今回の上越市さんにあやからせていただいて、晴天下で是非とも開催できるように心から祈念させていただいております。そしてまた参加各自治体の首長さんには全員こ

ぞってご参加をいただけますようお願い申し上げます。

最後になりますが、今回のさくらサミット開催に当たりまして特段のご配慮、ご尽力をいただいております上越市の宮越市長さんをはじめご関係の皆さん方に、心から厚くお礼を申し上げますとともに、このさくらサミットが来年も盛会に開催されますことを祈念させていただきます。どうもありがとうございました。

## 第9回 さくらサミット in 上越 '97

### 記録誌

「桜のまちづくりと住民参加」

---

発行日／平成9年4月

発行者／上越市役所

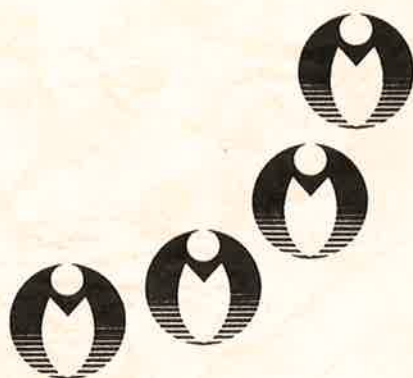
新潟県上越市木田1丁目1-3

TEL(0255)26-5111

企画・協力／ぎょうせいクリエイティブシステム

---

1997 無断転載を禁ず。



第9回

さくらサミット in 上越 '97

「桜のまちづくりと住民参加」

---

発行／平成9年4月

発行者／上越市役所

企画・協力／ぎよせいクリエイティブシステム